

Bloodborne The Demon Hunters

カンタレラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼舞辻無惨の襲撃が一年早く前倒しになり、富岡義勇が来なかつた世界線。

禰豆子を救いたいと願ったが故に悪夢に呼び出され、禰豆子と共に洞窟で寝た炭治郎のお話。

鬼化炭治郎に触発されて狩人化炭治郎とか良いんでなからうかと思ひ書いたやつです。

独自設定が多分に含まれてますのでお気をつけください。

ブラボは半年前にプレイしましたが、ほとんど臆げなので考察wikiと攻略wiki

i 頼りです。

これ違う！ つてなつても独自設定と思つて許してください……

p i x i v にも同時投稿しております。

目次

獣狩りの悪夢

悪夢に呼び出された赫灼の子 | 1

獣狩りの悪夢は終わり、獣狩りの夜が

始まる | 11

獣狩りの夜

束の間の休息、安寧の幕間 | 18

柱の襲来 | 33

異端者と柱の一問一答、柱達の決意と

覚悟 | 44

人目を気にせぬ異常者 | 59

恐怖の苗床 | 66

幕間 戦のその後 胡蝶しのぶの場合

幕間 戦のその後 富岡義勇の場合

87

90

幕間 血戦

94

邂逅

99

解放

105

幕間 独白

115

獣狩りの悪夢

悪夢に呼び出された赫灼の子

彼、竈門炭治郎とはある診療所の寝台から起き上がる。

彼には家族を殺されたという記憶もなく、妹を鬼にされた記憶もない。あるのは老人と話した後、獣に襲われるかと思えばそれが炎に包まれ、水分の抜けきった小人のような異形に体中を這われた記憶だけだった。

だが、彼は漠然と「■■■■を助けない」という使命感に駆られる。人名であろう場所にはノイズが走り、顔も一切思い出せなかった。靄のように朧げな使命感、ただその人は、いやその人だけでも絶対に救わなければならぬと心の奥底で何かを囁いていた。

その囁きに導かれるように道を進んでいくと、鼻を劈くような、酔いそうになる程に濃い血臭がする。恐怖を抱きながらも、音を出さないよう先を覗いてみると……

獣だ、獣が居た。意識を失う前に出会った黒く濃い体毛、強靱で巨躯な肉体、鋭い爪や牙、蕩けきった瞳。あの獣が人を喰っている。その事実には小さく悲鳴が出てしまい、獣に勘付かれてしまった。

即座にその場から逃げようとするも獸から発せられる強烈な殺気に当てられてしまい、彼の身は硬直し鋭い爪に引き裂かれた。死の恐怖によつて腰が砕けてしまふが、彼は這いずつてもその場から離れようとした。だが、彼の努力虚しく振り上げられた爪が頭部に吸い込まれ呆気なくその生涯を終えた。

目が覚めると、彼は馴染みの無い洋風の一軒家の前に居た。確かに死んだはずだ。爪で裂かれた激痛を感じた。殺気に当てられた恐怖もあつた。全ては夢だったのかと勘違いしそうになるが先程の感覚がそれを否定する。思い出しただけで嗚咽が出そうになるが、何とかそれを我慢して目の前にある家を訪ねてみることにした。

不思議な香りがする、例えるならば……そう、月の香りだ。そう彼はこの場所から感じ取つた。他にも傍らには人間と見紛う程に精巧な人形が捨てられており、階段の右手側にはほとんど名前が刻まれていない墓標が置いてあつた。階段の付近からは、最初の頃に出会つた水分の抜けきつた小人が武器を持って何も無いところから湧き出てきて、それに驚きながらもとりあえず無視し家の扉を開け……ようとしたが扉は固く閉ざされてお、仕方がないので周囲を探索した。

小人が持つていた武器を譲り受け、持つていた紙からは武器や水盆、墓標の扱い方を学んだ。因みに貰つた武器は仕込み杖。まだ12歳である彼は体格が小さく、筋力はあまり発達していない。その点仕込み杖は筋力をあまり必要とせず、変形後はリーチを補

えるので彼の肉体では重宝する。

……そしてもう一つ問題がある。彼は子供の体であるが故、銃器が使えない。育ちきっていない彼の体では銃器を使うための反動に耐えられない、反動の受け流し方も知らないのであれば肩を外すのは必至だろう。反動を無理やり抑えられるほどの筋力がないのであれば、おとなしく育つのを待つしか無い。

とりあえず最低限学んだ彼は、墓標から最初に目覚めた診療所に転移した。

彼が最初に殺したのは黒い体毛を持った獣だった。戦闘のせの字すら知らない彼はただ我武者羅に武器を振るい獣を殺した。攻撃をしては攻撃を受け、回避の方法やタイピングなど知らず攻撃を受けようが構わず武器を振るい続けた。返り血を浴びると自身が回復することや、相手からは獣とは思えない程に人の匂いがしたことに困惑したが、悩んでる暇はないと判断して武器を振った。

殺して最初に得た感想は、後悔と罪悪感であった。彼は自身を殺した相手にすら抱いてしまうほどに記憶がなくなるとも善良ではあった。あったが故に悩む。食われていた人を助けられなかった。人を喰った獣にしては強い人の匂いがして、この獣はもしかしたら元は人だったんじゃないかと。ここまで考えて彼は思考を止めた。人が獣になるわけがない。今は心の奥底で囁く何かに従うのが先決だ。そう判断し、彼は一切の馴染の無い街に繰り出した。

それから彼は殺し殺された。何度か街の住人に友好的に話しかけるも、その度に武器を向けられ罫り殺しにされた。今度ならばと希望を持ち、そして武器を向けられても子供の体では逃げ切れずに殺される。数回も繰り返せば無駄と理解し今度は彼から殺しに行くようになった。殺されたとは言え勿論最初は人殺しに罪悪感があり最初に殺した後は吐いた。ただ何度も殺され、そして自身が死亡すると相手が復活することを理解してからは罪悪感を薄れさせるのに拍車がかかった。

ここで彼の中に『襲つてくる奴Ⅱ全員敵Ⅱ殺せ』の図式が出来上がってしまった。敵を避けて通ることや逃げることで自体は無いわけではないが、先述のように彼は逃げ切れるほどの走力がない上に気配を消す技術など持ち合わせてないので武器を駆使して殺すしかなかった。だが彼は善良であるからか、基本的に自分から仕掛けることはない。ただ殺意や武器を向けてきたり、自身を殺してきた相手には次からは必ず殺すようになった。

最初は我武者羅で変形後は自分を切っていたりした攻撃は徐々に洗練されていき、最終的には自分を傷つけない程度には使いこなせるようになった。使いこなせねば死ぬだけだったので習熟は思った以上に早かった。

ここでふと、灯りが目に入った。触れると使者が這い出てくるのは分かったがどのような効果があるのかはあまり分かっていない。分かるのは触れると触れた灯りの場所

から復活するようになるということ。

使者が居り、自身の復活に関わっているから悪いものではないのだろうというのは分かっているが、どうやって使うのかを理解していない。とりあえず近くで屈み、灯りを眺めていると徐々に意識が薄れていくのが分かり、それに任せて彼は意識を落とした。

目を覚ますと先程の洋風の家の前に居た。ここで彼は漸く理解した。この灯りの性質について。

他にも墓標には新たに場所名が刻まれていることが分かり、あの街がヤーナムだと理解した。何故自分が見聞きしたことがない文字が読めるのかが疑問になったが、脳の間が開きかける感覚がして、彼にはそれがひどく恐ろしいものと感じ思考を止めた。

そして彼は、家の扉が開いてる事に気付いた。彼は恐る恐るお邪魔しますと声を掛けた家の中に入る。中には老人が居り、最初にこの場所へ来たときから常々感じていた不思議な香りがその人物から強く感じた。

これが竈門炭治郎と助言者ゲールマンの邂逅であった。

そこから彼は様々な助言をゲールマンから受けた。この場所や世界、そして人形について。基礎的な武器の扱い方や銃器による反動の受け流し方、基本動作であるステップでの回避や銃器での体勢の崩し方。他にも血の遺志や狩人の特異な性質、工房の扱い方、使者についても教わった。

ゲールマン曰く” 獣の膂力は強靱で強大だ、受けることなど考えずに全て避けること”

ゲールマン曰く” 分からないことがあれば脳に瞳を宿してみると良い。精神に異常を来す代物ではあるが、何も齎す物全てが悪い物という訳ではないのだから”

ゲールマンはそれらを教えると霞のように消えてしまった。彼はそれに驚きつつも、ゲールマンが居た場所に礼を言い頭を下げた。

それから彼は殺し殺され、囲まれて罅り殺しにあつたり銃器での体勢崩しをミスって殺されたり敵からの銃弾を受けつつも先へ進んだ。道中の遺体から狩人装束を拝借し、その遺体には感謝の念と黙禱を捧げた。

他にも窓越しではあつたが理性のある人と会話した。まともな人間が居るといふ事実が彼の精神的支柱の一つとなる。優しき病人であつたり、偏屈な老婆であつたり……とある少女と会ったときは彼の心の奥底で囁いていた何かがより一層と強く訴えかけてくる。この少女に何かあるのか、それとも記憶が失う以前のことに関わつてゐるのか。今の彼には分からないことだが、少女は母親を探しているらしいのでそれを探すこととした。

そして彼にとつて大きかつたのは、狩人狩りのアイリーンと出会えたことだつた。まだ子供であることに呆れられ、拙い戦闘にダメ出しをされた。それでもアイリーンは対

人戦での戦い方や、内臓攻撃のやり方などを教えてくれた。実演してもらったとき最初は驚いた。……まあ驚く程度で済んだのは成長と言うべきか此処に染まってしまったというべきか。

その後の彼は内臓攻撃を試しつつ、漸くの思いで大橋にたどり着くことが出来た。

この先には何かがある、嫌な予感が酷く強い。その奥から発せられる威圧感や彼自身の鼻からの情報を受け取った脳が警鐘を鳴らす。だが彼は止まらない、心の奥底で囁かれる何かを助けなければならぬ、と。故に止まらない。この先何があるかと彼の足を止めることは困難を極めるだろう。

そうして彼は出会った、出会ってしまった。今までの獣とは比較にならないほどの黒き巨獣。脳の瞳を開き、流れ込んできた“啓蒙”と。

その影響で彼は呆然とした。黒き巨獣の強大さに？ それとも奴から発せられる威圧感や殺気に？ そのどれもが違う。彼は啓蒙を得ると同時に断片的ではあるが忘れる前の記憶を思い出したのだ。毎回ノイズの走った場所には禰豆子と言う妹の名前が入るということ。自身は禰豆子の兄であり、その禰豆子が現在危うい状態であること。

その記憶を整理するために彼は立ち止まってしまい、黒き巨獣“聖職者の獣”に叩き潰された。

思い出した彼の心の奥底で自身を鼓舞するように囁いていた声はもう居ない。だが

彼には充分だ。充分すぎるほどに自身を支える為の記憶だったようだ。

彼が灯りから離れていく時、彼の目には轟々と燃え盛る決意の炎が宿っていた。

それから彼は狩って狩って狩り続けた。

聖職者の獣と戦った経験から、巨獣との戦い方を教わった。討伐後にさらなる啓蒙を得て、父親を思い出し、そして病死したことも思い出した。

狩りに溺れた神父と出会った。神父との戦いは狩人同士の戦いというものを教わった。遺体の側に赤いブローチを見つけ、嘘のつけない彼は少女にブローチを渡し本当のことを話した。少女の涙の香りと悲壮な声がして、自身が泣いても意味は無いと我慢したが、後に耐えきれず誰も居ないところで静かに涙を流した。そして神父と邂逅した時にも啓蒙を得て、家族の顔を思い出した。狩りを終えた時に得た啓蒙で自分と禰豆子以外の家族が全員死んだ事を思い出した。

彼は他の強大な敵と出会う度に、新天地に足を踏み込む度に啓蒙を得て、知るべきではない叡智と共に死んだ家族との幸せな記憶を思い出し気が狂いそうになっていた。だが自分は長男だからと。禰豆子が居るからと。そして家族はもう禰豆子しか居ないと。そうやって自身を奮い立たせ、精神を揺り戻し正気を保っていた。

彼は強大な敵に勝てず心が折れそうになった時。怖気を覚える程の上位者を見て気が狂いそうになった時。血に溺れ狩りに飲まれそうになった時。そういうときは必ず

禰豆子のことを思い出し、とある場所で聞いた警句を口に出す。

”我ら血によって人となり、人を超え、また人を失う”

”知らぬ者よ”

”かねて血を恐れたまえ”

と。狂わぬよう自我を強く保ち、溺れぬよう自己を強く律した。この時彼は既に無意識下ではあるが反復動作を習得していた。

他には様々な人と出会った。正気であつた者。正気を失つた者。心が折れた者。疑り深い者等様々な人と出会つては死別した。悪夢に似つかわしくないほどに人のいい彼は、あらゆる人と真摯に話しかけ、日輪のような暖かさに救われた者たちは彼に様々なものを託して行き、そして死んでいった。

死別によつて狂いそうになるのを必死に抑え、彼等彼女等の為に夜明けを迎えさせ死後の安寧を齎す為に、そして自分が禰豆子の許へ帰る為に躍起になって彼は狩り続けた。

彼は狩つた。多くの血の遺志と様々な工房道具を得つつ、自身や武器を強化していった。

彼は狩つた。様々な場所や敵から狩人証を拾い、そして同じ狩人からも託された。

彼は狩つた。千景と言う武器に望郷の念を覚え、仕込み杖から乗り換えた。

彼は狩った。様々な装束を人形に頼み、自分の体格用に仕立て直してもらった。

彼は狩った。月前の湖に居た上位者を狩り、秘匿を暴いた。

彼は狩った。様々な武器や秘儀を獲得し、それを扱う術を身に着けた。

彼は狩った。月光に導きを見出したものを狩り、月光の聖剣を手に入れた。

彼は狩った。狩人の夢に居る人形とよく似た女性を狩り、星見盤を手に入れた。

彼は狩った。本能が大きく警鐘を鳴らし、啓蒙が残酷なまでに酷く嘯き、気が狂いそうになるのを抑えながら目の前の異形をやつとの思いで殺した。

彼は狩って狩って狩り続けた。永遠と思える地獄の最中、漸く彼は夜明けを見出した。元凶である悪夢の主を狩り、その先に待ち構えてた乳母を殺した。

長かった……本当に長かった……

一夜の出来事とは理解しているが、彼にとって数ヶ月掛かったかのように思えた。だがそれもこれで終わりだ。

様々な艱難辛苦を経て、彼は涙を流しなから介錯を受け入れた。

これにて彼は目覚めを果たし、彌豆子の許へ帰れる。

かと思われた。

彼が次に目を覚ましたのは、ヨセフカ診療所の寝台の上だった。

獣狩りの悪夢は終わり、鬼狩りの夜が始まる

啓蒙が嘯く。

”まだ終わりではない”

啓蒙が嘯く。

”悪夢の完遂を”

啓蒙が嘯く。

”囚われの者に救済を”

啓蒙が嘯く。

”青ざめた血を求め、狩りを全うせよ”

彼は理解した。全てが無に還った事を。彼は理解した。介錯では目覚めを迎えられないという事を。彼は理解した。狩りを全うすることが、この終わり無き地獄から抜け出す唯一の方法だということ。

彼は悲観することはなかった。自身には戦ってきた経験がある、教えてもらった知識がある、血の遺志を注いだ力がある、敵対者を殺す武器がある。

そして、唯一の家族である彌豆子が居る。

そう自身に暗示を掛け、最悪の想像から目を背いた。

その後は鬼気迫る勢いで狩りを続けた。敵が以前より数段強くなるうとも、自分には頑張ることしか出来ないと言い訳をし、全て真正面から叩き伏せた。

隙の糸を嗅ぎ分ける技能を身に付け、事前に銃器での体勢崩しのタイミングが分かるようになった。

死に恐れを抱かなくなり、慣れることで精神の摩耗を抑えた。

高次元の知識に恐れ、必要以上に啓蒙を溜めることを嫌った。

血の渴望を抑えきれなくなって、常に警句を発する事があった。

常軌を逸した物に触れ続け、鎮静剤が手放せなくなった時もあった。

それでも彼は、理性や正気を失うことは無かった。自分は長男だからと。禰豆子には自分しか居ないと。自分が狂えば禰豆子はどうなると。永遠とも言えるような地獄の中で彼は自戒し続けた。

それでも囚われの者を見つけ出すことは出来なかった。行き詰まった彼は何度も何度も周囲に周回を重ね、失敗しても方法が悪かったと、もつといいやり方があるはずだと。自分にそう言い聞かせ、毎度の如くやり直しになる地獄を走り続けた。

……きっかけは些細なことだった。ある時狩人の夢でゲールマンと出会い、彼は助言を乞おうとした。だがその時のゲールマンは眠っており、とりあえず彼は起きるまで側

で待つこととした。

……ゲールマンが寝言を呟く。

”……ああ、ローレンス……ウイレーム先生……誰か、助けてください……”

”誰でもいい、解放してください……”

”……私は夢に疲れました。もう、この夜に何も見えないのです……”

”……ああ、誰か……”

”ううう、ああ……”

此処で彼は漸く囚われの者が誰であるかを理解した。

彼は我慢が出来なかった。恩師であるゲールマンが夢に囚われた状態ということを見ることが出来なかった。そして自身を許せなかった。何十周もしているのに今の今まで付けなかった事を。そこで理解した。自身がゲールマンを介錯しなければならぬと。

何十と繰り返した悪夢を終わらせ、彼は介錯を断った。そこで赫灼の狩人である竈門炭治郎と、最初の狩人であるゲールマンの戦いの幕が切つて落とされた。

一回目は老人とは思えぬ機敏さと、耄碌したとは思えぬ洗練された技巧に彼は為す術なく殺された。そして気付いた。ゲールマンに殺されると介錯と同じように最初に戻されると。

だが彼は折れない。漸く終着点が見えたのだ。終わりが見えず延々と周回させられ

ていた時に比べれば、彼からすれば努力する理由に足り得る出来事だった。

折れかけていた心は持ち直し、擦り減らしていた精神は摩耗を止めた。理性はより強靱に、正気はより強固に。

彼はこの状態では勝てないと思い血の遺志を注いで自己を強化した。聖杯を利用して武器を強化していった。別次元の狩人と戦い、経験を積んだ。

そうして何十も何百も同じ悪夢を繰り返し、ゲールマンに挑み続けた。

そして彼は、ゲールマンを介錯した。歓喜した、涙も流した。漸くゲールマンを開放することが出来たと。漸くこの地獄から開放されると。

だが、悪夢はそこで終わらなかつた。

月が秘匿を暴いたように赤く染まり、異形の魔物が顕現した。

彼の啓蒙が強く嘯く。本能が逃げると叫ぶ。心が折れる音がする。精神が擦り切れる感覚がする。

だが諦めることは出来ない。記憶喪失の直後に囁かれた声が、今度は『彌豆子を助けるんだ!』と彼に強く強く訴えかける。

諦めるわけには行かない。こいつを倒さねば、真の意味でゲールマンは開放されない。

絶対に諦められない。また同じ様に獣狩りの悪夢が始まれば住人や狩人のように苦

しむ人が出る、自分やゲールマンのように囚われる人が出る。

ああそうだ、倒せなかるうが、殺されようが、こいつを狩るのは俺にしかできない！
真つ直ぐに前を向け！ 己を鼓舞しろ！

「頑張れ、炭治郎。頑張れ!! 俺は今までよくやってきた!! 俺はできる奴だ!! そして今日も!! これからも!! 折れていても!! 俺が挫けることは絶対はない!!」

恐れなんてものはいらない。彼は躊躇いなく智慧を使った、叡智を使った、へその緒を握り碎いた。こいつを殺すための知識を得るために。忘れていた全ての記憶を思い出すために。

そうして彼は漸く思い出した。

”炭治郎この神楽と耳飾りだけは必ず途切れさせず継承していつてくれ”

”約束なんだ”

父親との思い出せなかった最後の記憶。今の今まで思い出すことの出来なかった神楽と己が付けていた耳飾りの約束。

彼は千景を鞘に仕舞い、血を纏わせ両手持ちに切り替える。

「ヒノカミ神楽・円舞!!」

千景には炎を幻視させるほどの闘気を纏う。舞うように武器を振るい、月の魔物を切り裂いていく。蠢く触手も、硬質な肉体も。全てを一刀のもとに等しく断ち切る。

数十年続いたかのように思える悪夢も。この世に強く根付いた禍根も。今までの苦しみも。住民達の悲しみも。狩人達の痛みも。

全てを終わらせるために、彼は武器を振るう。

武器を振るう、舞うように。

武器を振るう、炎を滾らせ。

武器を振るう、殺すために。

武器を振るう、彼らの悲しみを乗せて。

武器を振るう、同胞の痛みを乗せて。

武器を振るう、狩りを全うするために。

武器を振るう、禰豆子のもとへ帰るために。

そして、悲鳴が聞こえ、魔物が倒れ伏す。

拳の獣性を開放し、鋭い爪を相手の頭蓋に叩き込む。闘気を纏った千景で相手の首を切り落とす。

此処で、月の魔物が消滅するのを確認した。

此処で彼は仰向けに寝転がり、この夜が終わったことに歓喜し、一度引つ込んだ涙を滝のように流した。

これで漸く終わったのだ、漸く。

彼はとある洞窟で目を覚めます。いつものように診療所の寝台で目を覚まさなかつた事に安堵を覚えつつも、急いで禰豆子の安否を確認する。

頬に手を触れた。実体がある、体温がある、存在している。

やっとの思いで触れられた家族の温もりに、彼はもう一度号泣した。

鬼狩りの夜

束の間の休息、安寧の幕間

季節は立秋。目覚めた直後に彼がしたことと言えば……

「……血が落ちない…………」

家の大掃除であった。

血液が付着した布類を処分し、壁や床面、家具などに付着した血痕を削り落としていた。家族の遺体は埋めたとは言え、血痕を半年以上放置していたためそれはもうひどい有様であった。

削っても削っても消えない壁や床の染みに（あ、これは無理だ）と早々に諦め、数多の周回の末に手に入れた赤いブローチや小さなオルゴール、金のペンダントを質屋で売り捌いて、塗り壁用の糊と砂を買い壁の血痕を誤魔化した。……正直遺品のようなものや貰い物売るのは非常に躊躇ったが、流石に何百個もあると邪魔でしか無いので苦渋の決断の下ある程度売り払っていった。こういったものは本来然るべき場所に置いておくものだろうがその然るべき場所はもう無いというか帰れない、それに遺された物を有効活用するのも狩人の本質（言い訳）であるがために最終的には売った。

他にも家具も表面をある程度削り取って漆を塗り直したり、障子の和紙を張替えたりした。畳も引つ剥がし新しいものと交換した。

……何故こんな事をしているかというと、眠りについて未だ目を覚まさない彌豆子を家に眠らせようと思ったが（正直血塗れの場所や埃の被った所に眠らせておくのはなあ）と思い、家族が襲われた場所だけではなく家全体の埃を被っていた場所も全て掃除していったのだ。

そうして夜中に彌豆子を綺麗になった家に運び込んだ。

あとはまあ彌豆子が起きるまで待つても良いのだが、なんか何もしないのは落ち着かないので仕掛け武器の整備や修理をしたり、彌豆子を啓蒙で覗いて鬼の生態を学んだりと適当な雑事に従事している。

ある日の夜。彼が啓蒙の囁きに従いながら鬼についての生態を紙にまとめている時、彼の鼻が異常を告げる。腐った油のような……とにかく酷い匂いだ。

警戒しながら戸を開け、千景とエヴェリンを構える。数分ほど外で待ち構えていると、物陰から額に角をはやした生物——鬼——が高速で飛びかかってきた。鬼の脚力から繰り出される常人には捉えることが出来ないであろう速度で飛びかかれるも、彼は冷静にエヴェリンを向け引き金を引いた。

「グガッ！」

胸部を撃ち抜かれ、その場で体勢を崩してしまふ。無論そこを見逃す彼では無い。即座に腹部を貫き、臓物を引きずり出す。

「グブハア!!」

鬼は困惑する。何だこいつは？ 一般人じゃないのか？ 鬼殺隊ではないのか？
これが人間のやることなのか？

人間は本来非力で脆弱な生き物だ。少なくとも拳のみで鬼である己の肉体を貫くなんて可笑しい。鬼殺隊ならば忌々しい刀で首を狙うはずだ。なのに何故だ？ そもそもこいつは本当に人間なのか？

芳しく濃密な血の香りがして来たと思つたのに、近づいてみると触れてはならないよ
うな、見てはいけないような、知つては不味いような。本能が強くその香りに拒否反応を示す。いい香りの筈なのに、腹の底から求めるような香りなのだ。

そして鬼は気付く、撃ち抜かれた胸部付近に相手の血が少しだけ残っていることに。そしてその血が吸収されず自身を蝕んでいることに。しかし問題ない、この程度の量なら鬼の再生力で回復が押し切れるからだ。

「よし、水銀弾は効くみたいだし、その様子を見ると俺の血を吸収できてないみたいだな」

鬼は逃げようとした、香りに誘われたのは人を喰うためであつて、喰えないとあらば

こいつを無理に相手する必要はないと判断した。

内臓を引きずり出された激痛に耐えつつも足に力を込め、その場から離れようとするが……

「申し訳ないけど、お前は実験台だ。逃がす訳には行かない」

両足を付け根から切り落とされ、その場に崩れ落ちる。動作ですら一切見えず、圧倒的な実力差に恐怖を抱いた鬼は腕で這ってでもそこから離れようとするが、背中を踏みつけられ両腕も切り落とされる。

「あまり他者を必要以上に甚振る趣味はないから大人しくしていてくれると助かるんだけど……」

そういいながら彼は感覚麻痺の霧を鬼に振りかける。

「なんだよお前!! なんなんだよ!!」

恐怖と激痛で半狂乱になりながら問いかける。

「俺? 俺は唯のしがない狩人だよ」

彼は日輪のような笑顔を浮かべながらそう言う。

鬼の生態に関する実験手記 ○月×日 竈門炭治郎

現在把握している事は

・人を喰らうこと

・常人より身体能力が非常に高い

・再生能力が高く、基本的には不死である

・血鬼術なる、異能の力を扱う

・鬼化には鬼舞辻無惨が関わっていること

・その鬼舞辻無惨に呪いを掛けられていること

・日光に弱い

・己の血液をエネルギーとすること

・藤の花を嫌う

・日輪刀なるもので頸を落とすと死ぬ

以上が啓蒙によって得られた知識である。

今回の目的は日光、血液の喪失、藤の花、日輪刀以外の有効な手段を探ること。

主な実験内容は血質攻撃、神秘、炎、雷光、遅行毒、劇毒、発狂の有効度を検証していく。

余裕があれば青い秘薬による自白や感覚麻痺の霧の効果時間、祭祀者の骨の刃による効果も検証していくこととする。

最終的には失血死が有効かの検証も視野に入れる。

実験その1

血質攻撃の有効度

結果

血質攻撃自体には、一時的な遅効毒のような効果を齎すことが分かった。即効性はあ
るが遅効毒のように持続性が無いのであまり過信することは出来ない。だが千景が有
効なようで安心した。

実験その2

神秘の有効度

結果

今回はロスマリヌスを使ってみたが、耐性が殆どないことが分かった。だが殺すまで
には至らないので感覚麻痺の併用が必須になる。

実験その3

炎の有効度

結果

獣並みには効くが、やはり再生力が高いので殺すまでには至らない。

追加実験

油壺を使った場合

結果

殺しきる事はできない。だが相手の体力を大きく減らせるので、再生力を削ぐのには有効かもしれない。

実験その4

雷光の有効度

結果

人間並みに効くこと以外は同上。だが電流による筋弛緩や硬直が行動停止に有効かも知れない、要検証。

実験その5

遅効毒の有効度

結果

再生を遅らせる程度。有効かどうかと聞かれれば微妙。ただ感覚麻痺の霧を使わずに再生を遅らせた場合には有効。

実験その6

劇毒の有効度

結果

酷く苦痛を与える程度でたいして有効ではない。遅行毒もそうだったが常人以上に

耐性が高く、発症させるのに若干苦勞する。

実験その7

発狂の有効度

結果

瀉血の槌で鬼の腹を貫いてみたが、先程からの検証で精神崩壊を起こしているのかあまり良く分からなかった。次に持ち越すこととする。鬼と言っても精神は存外脆弱だっったりするのだろうか。

実験その8

青い秘薬による自白、それによる呪いの発動

結果

実験不可。先程にも書いたように、精神崩壊を起こしてまともに会話できるような状態じゃないので次に持ち越すこととする。

実験その9

感覚麻痺の霧の効果時間

結果

獣や人間と大差無く一定の効果を発揮する。

実験その10

失血による変化

結果

血液量は常人より遙かに多く、脂肪や筋肉から湧き出るのが分かった。だが数度内臓攻撃を繰り返している内に湧き出る血は止まり、再生力や膂力等々が弱体化して常人程度までに下がることが分かった。更に数度繰り返した結果、最終的には干乾びて自壊した。

鬼の死亡を以て、今回の実験を終了することにする。

失血死によって殺すことが出来る事を知ったのは僥倖ではあるが、流石に毎回何十回と内臓を引きずり出すのは正直手間がかかるので避けたい。青い秘薬による脳の麻酔が有効であることを祈る。若しくは早急に日輪刀を入手しなければならぬ。

他にも手に馴染んだ仕掛け武器を鬼狩りに使うため、発火ヤスリや雷光ヤスリのように鬼に対しての特攻を得られる狩道具を自作する必要があるかもしれない。

「よし、こんなところかな」

先程の鬼で得た実験内容を記し終え、軽く伸びをする。素人が作ったにしては上出来だろう。

正直自分から鬼を探しに行きたいと彼は思っているが、眠った状態で無防備な禰豆子

を一人置いていくつもりもないので何かしらの鬼をおびき寄せる方法を思索する。

「うーん……匂いたつ血の酒でも良いんだけどどれくらい匂いが広がるかわからないし、広がりすぎて街に被害が出るのもなあ……」

一応言っておこう、彼は拷問紛いの実験をしたり鬼の絶叫や「止めてくれ」といった懇願を聞いても一切表情を動かさず笑顔で対応していたが、基本的には善良である。もう一度言おう、基本的には善良である。狂人に片足突っ込んでるかも知れないが善良なのである。そもそも鬼自体はあまり憎いとは思っていない、精々獣か豚と同程度である。だから態々手間を掛けてまで苦しめて殺す必要はない。というより只々鬼舞辻無惨が憎い、家族を殺して妹を鬼にしたあいっだけは絶対許さん。必ず殺す。家族を殺した分だけ殺す。

とまあ話は逸れたが、善良であるがために無辜の人々に被害が出る手段を取るの躊躇うし、鬼に襲われている人をなんとかしたいとも思っている。だからといって禰豆子の下は絶対に離れないが。

とりあえず被害を出さずにおびき寄せる方法が思いつかないので、とりあえず現状維持。先程の鬼のようにここに来る鬼もいるかも知れないし、最悪禰豆子が起きてから探しに行けば良いのだ。

そう結論付け、装束に付いた血を落として再度他の雑事を始めた。

数日後。

前までは雑事をやっていたが、それも全て終わってしまった。何もやることなく本当に暇で暇でしようがないので人形ちゃんを夢から呼び出し、一緒に禰豆子の着物を仕立てていた。他にも人形ちゃんが着ている服のスペアや貴族のドレスを禰豆子用に仕立て直したりもした。

(……そう言えば別次元の狩人の中には男でありながらこれを着ていた変態が居たな……いや、全裸に金のアルデオを装備したやつよりかはマシなのだろうか……?) 申し訳ないけどどちらも少し気持ち悪いと思ってしまった、本当に申し訳ないけど。そしてそういう手合は総じて手強いのがなんとも……)

と、暇が高じて下らない思考に耽っていると、戸が叩かれる音がする。以前の鬼とは違い、普通の人間のような。実験ができないことを少し残念に思いつつ戸を開け、顔だけ出す。

「……どちら様でしようっ？」

彼は若干の警戒を顕にする。詰襟を着ており、腰に帯剣している。何が起きても良いように戸で見えない方の手で、夢から慈悲の刃を取り出して羽織の下に隠す。

そして相手も警戒をされるのに慣れているのか、特に気にした様子もなく彼に話しか

ける。

「突然の訪問申し訳ありません、私は鬼殺隊という組織に属している者です。お伺いたいことがあります……親御さんはおりますでしょうか？」

「親は他界していません、今は妹と二人きりで暮らしています」

相手から罪悪感の匂いがする。

「……すみません、知らずとは言え失礼なことを」

「お気になさらないで下さい。とりあえず、立ち話もなんです。お茶を出しますので上がりませんか？」

彼は家に招き入れる事にした。こんな怪しさ満点のやつを家に入れるのはどうかと思うが、それでも一応ちゃんとした理由が三つある。

一つは口封じが楽なこと。二つ目はこの人から悪意の匂いがしないこと。そして三つ目はこの人物からある種の導きを見出したからだ。隙の糸とは違う、惹かれるような、手繰り寄せたくなるような光の糸を。

彼としては初めての感覚なので何に見出したのかは分からない。この人物なのか、それとも鬼殺隊という組織になのか。

少なくとも敵対するのは得策ではないと感じた彼は、ある程度穏便に事を済ませようとする。

「ああいえ、大丈夫です。あまり時間は取らせませんので」
「そうですか……」

若干残念に思いつつも、用件を聞く姿勢に入る。

「単刀直入に聞きます、鬼を匿っていたりしませんか？」

「……なぜ、そう思うんですか？」

顔を引き攣らせながら彼は言う。

「この家に鬼がいるという情報が入りました、正直あなたを疑いたくはありませんが……少々調べさせてもよろしいでしょうか？」

急激に香る敵意の匂いに彼は即座に動いた。腰に当てていた手を捻り上げ家の中へ引き摺り込み、首を締め上げる。そうして力が抜けたことを確認してから冷静に戻る。と、やってしまったという思いしか残らなかった。

穏便に済ませると思った矢先にこの為体。正直焦りすぎたと反省している。だからといって禰豆子を殺されるわけには行かないので後悔はしていないが。

「狩人様……」

人形ちゃんから咎める声が聞こえる。その一言が彼の心を容赦なく突き刺した。

「違うんだ、いややったことは違わなく無いんだけど……正直焦りすぎたと反省しております……」

「とりあえずお医者様の所へ送って行かれるのはどうでしょう？」
「……分かりました」

しようがないので、すぐ反撃されても困るといふ理由とちようど自分にとって都合がよかったため日輪刀を拝借し、医者の方まで持っていった。

そこからはまあ、数日に一度来る鬼に対して実験したり、数日に一度来る鬼殺隊の隊士の日輪刀を粉碎して医者送りにしたり。あとは偶々鬼と一緒に鬼殺隊が来て鬼殺隊と共闘したりと、まあ彼にとっては暇はしないがそこそこ退屈な日常を送っていた。

実験手記 追記

実験その7

発狂の有効度

結果

精神崩壊を起こすのみで、殺すには至らない。

実験その8

青い秘薬による自白、それによる呪いの発動

結果

会話すら儘ならない状態になってしまったため、失敗である。



柱の襲来

現在は昼、男女の二人組が彼の家に近づいていく。どちらも詰襟を着込み、羽織は着用している。腰には帯剣しており、その特徴から鬼殺隊と分かる。

「——聞いていましたか？ 富岡さん」

片や蝶の紋様の羽織や髪飾りを付け、笑みを絶やさず落ち着いた口調で男に話しかける蟲柱、胡蝶しのぶ。

「……………」

片や長い髪を結び左右で紋様の違う羽織を身に付け、無表情で口を噤み寡黙を貫いている水柱、富岡義勇。

「返事くらいしたらどうです？ そんなだから皆から嫌われるんですよ？」

朗らかな笑みを浮かべた状態で毒を吐く胡蝶しのぶ。

「俺は嫌われてない」

内心シヨックを受けつつも、無表情で強く否定する富岡。

「漸く口を開いたと思えば、開口一番がそれですか？ もう少し言うべきことが他にありませんように」

胡蝶の言い分に思う所が有るのか富岡は若干面倒そうな表情を浮かべながらも、説明するために口を開く。

「……………あの家は、一年前に鬼に襲われたはずだ。そう隊士からの連絡があつた」

まともに説明できた富岡に驚きながらも、胡蝶はその言葉から続ける。

「それが今や鬼に魅入られた人が鬼殺隊を退けている、と。俄には信じがたいですねえ、一般人が隊士を退けるなんて」

一般隊士だろうが鬼殺隊である。育手の厳しい修行に耐え抜き、苛烈な選別をくぐり抜けてきた猛者たちである。その隊士が鬼に魅入られたとは言え一般人に遅れを取るとは思えない。

「そして不可解な点がもう一つ。その家に行った者は日輪刀を砕かれるも、大体は無傷で帰ってくる。鬼に魅入れるとなれば生きて帰ってくる者は居ないはず。その上階級、甲が複数人で行っても無傷で送り返すっていうことを鑑みるに相当な実力者かも知れませんか」

曰く、それは子供だった。曰く、鬼の特徴は一切なかった。曰く、一瞬で意識を刈り取られた。曰く、相手の一振りで日輪刀が折れた。曰く、素手で日輪刀を砕かれた。曰く、それは呼吸を使っていない。曰く、おかしな武器を使っている。曰く、鬼が出てきて共闘したことが有るが姿が捉えきれず、終わったと思つたら蝶屋敷に居て日輪刀がな

くなっていた。

と、胡蝶からしたら証言を聞けば聞くほどに信憑性を疑わざるを得ない。

「鬼と戦うということと、こちらを無傷で退けることを考えると本当に敵なのか怪しいですね。ですが相手の正体が不明な以上、普段の鬼より、特に武器破壊に警戒する必要が—— 本当に聞いていますか？」

富岡は少しだけ眉間に皺を寄せる。

「……ああ」

その様子に胡蝶がため息交じりに呆れながら言葉を紡ぐ。

「返事ができるなら先程も同じ様に返事をしてください、そういう所が嫌われる原因なんですよ？」 富岡さん」

解せぬと思いつつ、もう面倒なので無視する事と決め込んだ。

そうこうしている内に、目的地に着いた。

……鬼が居ることは間違いないらしい。その気配を肌で感じとることが出来る。だがもう一つ妙な気配を感じ取る事が出来る。無機質に近い何かが自ら動いているようだ。本当に人間かも怪しい。

無傷で隊士を返すことから対話の余地はあるだろうと考え、とりあえず戸を叩き相手の出方を伺う。

「はーい」

戸の奥で急に現れた気配に二人は驚く。鬼でもなければ先程の無機質に近いなにかの気配でもない。声を出した途端、急激に気配が濃くなった。

そして、少しだけ開けられた戸から出てきた顔に驚く。子供とは聞いていたがこんなに幼いとは。

「あらあら、こんなにも幼いなんて……一応聞きますけど、あなたが隊士を？」

急激に現れた気配といい、見た目の幼さといい。半信半疑であった胡蝶は問う。

格好から相手が何者かを察した彼は、眉を顰めながら返答した。

「……ええ、まあ」

そろそろ鬼殺隊のことを面倒だなど思いながらも、彼自身元来の善性と導きの系によつて、問答無用で無慈悲に殺すということはしなかった。

……まあ禰豆子を傷付けられれば導き関係なく殺すが。

そんな彼の様子を気にも留めず、胡蝶は言葉が続ける。

「そんな貴方に二つほど、聞きたい事があるんです。一つは何故鬼を匿うのか、そしてもう一つは何故隊士を無傷で返すのか」

それで今後来なくなるならばと思ひ、素直に喋る事にした。

「二つ目はたった一人の大切な家族だからです、だから鬼になろうと誰にも殺させるつ

もりはありません。二つ目はあまり敵を作りたくなかったのと……あとは貴方達のように対話を試みるような人を待ってましたから。そして話の通じる貴方達に折り入ってお願いがあります、どうか家族を見逃していただけませんか？」

彼は腰を折り曲げ、頭を下げる。が、それに胡蝶は応じなかった。

胡蝶は首を横に振りながら敵対の意志を表す。

胡蝶自身、こういった人を相手にするのは初めてではなかった。大切な家族だから止めてくれと。だがそれで止めてしまえばその人は家族に食い殺される。そして鬼を先に殺せば今度はその人が牙を剥く。そして気絶させても、起きればまた襲ってくる。鬼に魅入られた数ある事例の一つだ。

だからこうなった場合、片方を戦闘不能にして鬼を手早く殺してしまうのが手っ取り早い。

「申し訳ないのですが、それは出来ません。私達は悪鬼を滅殺するという志の下、活動しております。例え貴方の大切な家族であろうともそれは変える事は出来ません」

胡蝶は思った。こんなことならば有無を聞かずさっさと不意打ちなりしてしまえば良かった。幼いながらも、此処まで真剣に家族を守ろうとしている彼の家族を殺すことは罪悪感を感じる。

だからといってそれとこれは別だ。鬼は滅殺しなければならぬ。

「……そうですか」

彼は頭を上げて諦観したような声を出し、そろそろ導きを見送るべきかと思案する。

「ですが大丈夫です！ 家族を鬼にされ、剩えその鬼に魅入られてしまう可哀想な貴方も、苦しまないよう優しい毒で殺してあげます。安心してください、すぐにその鬼も送って差し上げます」

そう言いながら胡蝶は微笑みを浮かべ、刀を抜く。態と挑発する様な言動をし意識を己に向けさせた。

それに続き、富岡も刀を抜く。

胡蝶は即死せぬ様、そして確実に戦闘不能にする為足の付け根を狙った突きを放つが、彼をその射程から即座にステップで離れ臨戦態勢を取る。腰に差した日輪刀を抜き放ち、エヴェリンを構えた。

避けられた事に驚きつつも、相応の実力者である事を承知していた為冷静に小声で富岡へ鬼を殺すように伝える。

「あの子は私が抑えておきますので、富岡さんは奥の鬼をお願いしますね」

「ああ」

” 蟲の呼吸 蜻蛉の舞い 複眼六角 ”

牽制と拘束に重きを置いた無数の突きを放つ、先程の身のこなしを見て当たらないだろうということは分かっていた。だから下手な行動が出来ぬよう、息継ぐ暇も無い連撃を繰り出そうとした。

が、彼は隙の糸を見極め、初動を予測し、一突き目が放たれる瞬間にエヴェリンを撃つた。

「ッ!？」

射出された水銀弾が鎧に当たり、攻撃を止めてしまった上に思わぬ衝撃で体勢を崩し、重大な隙を晒してしまう。

胡蝶は不味いと思ったが、全身は痺れた様に動かず、力が抜けて膝を突いてしまった。だが彼はその隙を見過ごし、加速の業を使って富岡の前に立ちはだかる。突然現れた彼に驚きつつも、富岡は冷静に刀を振るい迎え撃つ。

”水の呼吸 壱ノ型 水面斬り”

胡蝶の突きが弾かれ、迎撃技である雫波紋突きは危険と判断し、水平斬りを放つ。

彼はそれを軽く上体を反らし、紙一重で避ける。だがその反らした隙に、富岡は即座に離れてしまった。

いつも以上に禰豆子に危険が迫り、脳内が激情で埋め尽くされる。彼は荒ぶる感情を脳内で警句を思い浮かべることで落ち着かせていく。

「ああ分かった、よく分かったとも。お前達が本気で禰豆子を殺そうとしている事を」
彼が一言発する毎に、その場の温度が下がる。彼の一つの動作が、その場を濃密な殺
気で埋め尽くす。

「最初から和解を求めることが無駄だったんだ」

日輪刀を仕舞い、夢から落葉を取り出し甲高い音を鳴らして双剣に変形させる。

「そろそろ鬱陶しいって思ってた頃合いだった、此処が引き時なんだろう。抑止の為に
一人二人は犠牲になってもらう」

” 我ら血によつて人となり、人を越え、また人を失う”

” 知らぬ者よ”

” かねて血を恐れたまえ”

彼は息を大きく吸い、声を荒げる。

「来い！ お前らなんか禰豆子を殺す資格は無い！ 来るのが一年遅いぞ間抜け共
!!」

今の今まで甘かった自身を咎めながらも、意識を切り替える。

” ゲールマンの狩りを知るのが良い”

「居るんでしよう？ 出てきてください、隠の方」

彼は度重なる鬼殺隊の襲撃で隠の人とある程度の面識はあった。と言つても気絶した隊士を引き渡すからなのだが。

呼びかけても出てこない隠に少しだけ痺れを切らし、ちよつとした脅しをかける。

「早く出てこないところいつら本当に殺しますよ」

朗らかな笑みを浮かべながら、物騒なことを吐き出す。

すると全身黒装束で、顔を覆い隠した黒子が慌てた様子で出てくる。

非戦闘員に手を出さないのである程度警戒は解けたが、今回ばかりは柱をも気絶させたと言うこともあり、相応の警戒心を与えてしまった。

「だー!! 分かった分かった！ すぐに出てこなかった事は謝るからそれはやめてくれ」

何かと此方の家に来る事が多い後藤という隠である。と言つても最初に行った時に

気絶させられなかったからと言うだけでこの任につかされた可哀な隠である。最初にこの任を受けた時は死を覚悟したらしい。

「居るならさっさと出てきてください」

「悪かったつての……にしても、強い強いとは思っていたがまさか無傷で柱を打ち倒すとはな……」

そう、彼は二人を殺さなかった。彼の生来の甘さと、この二人から強く輝く導きの糸が頭の隅をちらつき、鬼舞辻無惨への憎悪が彼の刃を鈍らせた。この導きが鬼舞辻無惨に繋がると思ったが故に。

それに今回はまだ未遂なので、気絶するに留めておいた。これで本当に傷付けていたら、二人の柱はこの世にいなかっただろう。

「思ってたんだが、今回はやけにこっ酷くやったんだな」

致命傷はないものの、全身裂傷だらけだった。失血によって気絶したようだ。

「流石に大切な家族を殺されそうになって、冷静を保っていられるほど根気強くは無いです。それに、これだけやっておけば向こうも手出ししづらくなるでしょう」

とりあえず彼は失血死しないよう聖歌の鐘を鳴らし、傷だけ塞いだ。

「奇つ怪な武器といい、理解不能なそれといい。一体何者なんだ……」

人差し指を口元に置きながら彼は言う。

「好奇心は猫をも殺す、下手な詮索は止めておきましょう。知られたくないと言うより貴方に危険を及ぼしたくないんです、脅すために言ってるわけではないので勘違いしないで下さい。とは言えこれに関しては私もあまり理解できていませんが。つてことで私ももう疲れたんでさっさと持ってつちやっってください」

彼は矢継ぎ早に喋り柱の二人を投げ渡して、家の中に帰っていった。

……因みに今回は失血でしばらく動けないだろうと判断し、日輪刀を砕かなかった。

異端者と柱の一問一答、柱達の決意と覚悟

「カー！カー！　水柱、富岡義勇。蟲柱、胡蝶しのぶ。ソノ兩名ガ鬼ヲ匿ウ異端者ニ敗レ共ニ戦闘不能！　水柱及ビ蟲柱ガ回復次第、緊急柱合會議ヲ始メル！！　回復狀況ヤ期日ハ追ツテ報告スル！　ソシテソレマデノ期間、鬼ヲ匿ウ異端者ニ一切ノ交戦ヲ禁ズ！」

富岡義勇は早々に蝶屋敷を抜け、炭治郎の家に来ていた。

酷い貧血に苛まれるが、不思議と体に傷は無くふらつく頭を除けばすぐにでも動ける状態だった。

そうして家の戸を叩こうとするが、そこで富岡は固まる。

富岡は考える。相手からしたら自分は家族を殺そうとした仇敵だ。今更どんな顔をして会えば良いのだろう。そもそも次は問答無用で武器を抜くかも知れない。今度ばかりは相手が見逃すとも思えない。だからといって緊急柱合會議までの時間も無い。

さてどうしたものかと考えてると、急に戸が開く。

「……やはり貴方でしたか。よく懲りずに此処に来ようと思いましたがね」

彼は呆れによるため息を吐きながら、エヴェリンと落葉を夢から取り出す。正直言ってもう面倒だ、家族との思い出があるこの家から離れるのは物凄く嫌だがそろそろ拠点を変えるべきかと思索する。

だが富岡はそれに制止を掛ける。

「待て……俺は話を聞きに来ただけだ」

その言葉に彼は眉を顰めるが敵意や殺意を匂わせず、いつまで経つても奇襲をする様子が無かったのを見るにどうやら本当に対話を望んでいるようだ。彼にとつては願ってもない申し出ではあるが……一度敵対した手前、どうにも信用することが出来ない。

だが、ここでふと彼の鼻が富岡からとある感情を嗅ぎ分けた。

「……一度殺し合った相手に罪悪感を抱くなんて、難儀な人ですね」

そう、富岡は罪悪感を感じていた。

彼が交戦する直前に発した『一年來るのが遅い』という言葉が、富岡の精神を揺らかせた。

しかし時を巻き戻す術は無い。ならば少しでも彼の情報を集め柱合会議で、彼を敵視しないような方向性を持つていくべきだと富岡は考えた。

富岡は思う、これは償いだ。だが単なる自己満足でしか無いことも理解していた。それでも動かずにはいられない。彼と敵対することが不味いというのもある。だがそ

れ以上に、家族を殺され、唯一残った家族を鬼にされようとも、ただ直向きにそれを守ろうとするその姿勢に思う所があった。

柱を打ち倒す実力があるなら助力なんてものはいらないかも知れない、だからこれは単なる自己満足だと理解している。

「……何を考えてるかわかりませんが、まあいいです。その日輪刀をこちらに預ける事が出来ると言うのなら、お茶くらいは出します。どうしますか？」

この要求を呑むならば危険はないだろうと考え、とりあえず彼は受けることにした。……彼の甘さが出た。問答無用で追い返すでもなく無慈悲に殺すでもなく、讓歩案を出して相手の提案を受け入れてしまった。と言うより普通の狩人なら扉越しに散弾銃で逆に奇襲している所だ。

その讓歩案を聞いた富岡は、腰に差した日輪刀を鞘ごと抜き、躊躇いなく彼に渡した。彼としては躊躇くらいはして欲しかったものだ。今は戦闘に発展してないとは言え一度敵同士であった身、そいつに躊躇いなく武器を預けるのは如何なものかと思う。というかぶっちゃけ面倒だから断ってほしかった。それならそれで相手の要求を突っぱねる事もできるから。

今度は彼がどうしたものかと考えつつ、日輪刀を夢に仕舞いお茶を用意する。

「では、改めまして。俺は竈門家の長男、竈門炭治郎です」

富岡にお茶を出し、囲炉裏を挟んで反対側に座る。

「……富岡義勇だ」

彼の自己紹介に富岡はそう短く答える。

口下手な富岡は大した腹芸は出来ないので率直に質問をすることにした。

「……お前は、何故鬼になった家族に殺されなかった？」

本来鬼化した直後は酷い飢餓感を覚え、そして栄養価が高いのか優先的に家族を狙うようになっていくはずだ。富岡はそれを聞きたいのだろう。

その質問に彼は少し悩む素振りを見せるが、その後すぐに首を横に振る。

「こればかりは何もわかりません。一度鬼化した直後に襲われたんですが、何度か呼びかけを行った後にすぐに眠ってしまっ……あまり大した事は分かっていないんです。恐らく禰豆子……俺の妹が特異体質なのではないのかと思ってます」

言ってしまうえば啓蒙で覗けばすぐにでも分かることなのだが、正直鬼として覗くならばまだしも禰豆子自身を覗くのはなんかやっつけはいいけないような気がする。個人の、しかも女性の秘密や情報、真実を暴くのは非常に失礼なことだと思い、今の今までやってこなかった。多分これからもやることはないだろう。大して気になることでもなければ、彼にとってはそれほど重要でもない。

「……次の質問だ、お前の妹は人を喰ったか？」

彼は強い意志を以て首を横に振る。

「いいえ、鬼として目覚めて俺に襲いかかった後に眠ってしまい今の今まで起きてないんです。それに家族の遺体に喰われた跡が無いので妹は家族を喰っていませんし、眠っている間に喰らうなんてことはありえないでしょう」

言葉には出さないが禰豆子からは悪鬼の匂いと、死血の香りがしない。本来悪鬼は腐った油のようなひどい匂いや、人間を食っているからか死人の血の匂いがするのだが禰豆子からはそれが一切ない。

彼のような夢に依る狩人は、死者の遺した血を己の糧とするため良く知っている。それでも悪鬼から匂うものほど強烈ではなかった記憶だが。

富岡は彼の言葉を聞き、最後の質問に移る。

「……最後だ、もしお前の妹が人を喰らった場合どうする」

彼は一瞬だけ眉を顰めたが、すぐに元の表情に戻る。

「やらせません、もし妹が人を喰おうとしたら死んでも阻止します。……つていう言葉は望んでいませんよね？ ……なので貴方達が納得するような言い方をするならば……」

彼は少し息を吸い、想像するだけで発狂しそうになるのを何とか抑え込みながら言葉

を紡ぐ。

「俺が妹の頸を斬ります」

富岡は年端も行かぬ子供にこんな事を言わせるのは酷く罪悪感を覚えたが、これならば柱合会議である程度敵意は抑えられると思い、納得して頷いた。

そこで彼はそれに、と続ける。

「妹が獣以下の畜生に堕ちるなんてことは家族としても狩人としても見過ごすわけには行きません。……ですがそれをさせないために俺がここにいるんです。だから絶対に妹を悪鬼に堕とさせませんし、必ず人間に戻してみせます」

彼の意志を見た、決意も見た、根は善良な人間性を持つていることも分かった、判断力も悪くないと感じた。ならば今度はこちらが決断するべきだろうと富岡は考える。

そこでふと、富岡は先の質問と関係ない疑問が湧き出る。

「……先のととは関係ないが、一つ良いか。お前ほどの実力があれば俺達を相手取っても充分に妹を守るはずだ。なのに何故敵対を拒んだ。お前からすれば利点は少ないだろう」

導きなんて言葉を理由にしても通じないだろうと考えた彼は、それ以外の理由を持ち出す。

「敵を作つて妹の危険が増えるのが嫌だった、つていうのと……」

彼自身が自覚していない狂気や家族愛を越えた偏愛のような何かを孕んだ、ある意味狩人となつた彼らしい理由だった。

「人殺しの兄というのは嫌でしょう？」

そう、全ては禰豆子の為だ。狩人でありながら敵対者に慈悲をかけ、最早無い倫理や常識でありながら不殺を貫いたのも禰豆子の為だった。

なぜ彼が此処までするのかと言うと、家族は禰豆子以外は全員が死に絶え、同胞である理性ある狩人はもうおらず、恩師であつたゲールマンはこの手で介錯し、悪夢に囚われてた無辜の人々も全員死ぬか狂うかの二択だった。そんな彼にはもう禰豆子しかない。

だからこそ禰豆子が人殺しをする兄を持つのは嫌だろうと不殺を貫いた。血に酔つた無慈悲な狩人が兄というのは嫌だろうと悪夢の中、根幹に残つた善性で理性を保ち続け、人間としての甘さを捨てなかつた。気が触れた狂人の兄というのは不味いだろうと上位者を相手取つても正気を壊さなかつた。全ては禰豆子の為に。

……それは、残つた禰豆子だけでも、家族を殺された上に鬼に変えられた不幸以上に幸せを感じて欲しい。という彼の純粋な願いだった。

……その病的なまでに強い願いが、既に狂つてる証拠だと気付くのはいつになるだろ

うか……

「……そうか」

言外に『妹がいなければ殺していた』と言われた富岡は寒気を覚えると同時に、理解した。彼は如何に本気かということ。今の今まで犠牲者はいなかったが妹を傷付ければそれこそ命はないと。鬼殺隊が妹を傷付ければ、その瞬間鬼殺隊は終わると。そして後悔した、柱合会議での説得の一助になればと思つて軽はずみな行動をした自身を責める。

……彼という怪物が生まれなかつた理由である妹には感謝せねばなるまいと思つた。本来鬼を狩るのが生業である身だからか、若干複雑ではあるが。

そんなこんなで質問等々は終わり、富岡は日輪刀を返してもらい自分の屋敷に足を向けた。正直どこに仕舞つていたとか、以前使つてた武器はなんだとか、傷を直した方法だとか。聞きたいことは山程あつたが、余計な詮索だろうと判断してやめておいた。以前一戦交えたというのに、これ以上印象を悪くする必要は無いと。

そうして幾日か経つた。

「お館様の御成りです」

そう声が響くと柱達が膝をつく。

「よく来てくれたね、緊急にも関わらず集まってくれてありがとう」
柱の誰かが口を開く。

「いえ、我々一同お館様のお呼びとあれば何時如何なる時でも馳せ参じる所存でございます」

その言葉に産屋敷は微笑みを浮かべながら感謝を述べる。

「ありがとう、私の可愛い剣士達」

「さて、何があったか教えてくれないかい？」

産屋敷の言葉を皮切りに、元々重かった雰囲気更に重くなる。

その中で、胡蝶が一番に重い口を開く。

「……隊士の証言以上の子でした。子供という身で、鬼の特徴はなく、呼吸を使わずに柱を圧倒する。武器に関しては恐らく日本刀に近い代物だとは思いますが変形機構を有しており、柄頭に付いた刃が分離して二刀流として扱うことが出来ると言うことしか分かっています……そして、一つ不可解な点が……」

自分でも半信半疑なのか、言葉を出しかねている。

そして意を決した胡蝶は、軽く頭を押さえながら喋りだす。

「……あの子と出会ってから脳のが開きかける感覚がするんです。その感覚を得てからというところ……そうですね、物事の本質を捉えて真実を理解しやすくなったような感じがするんです」

的を得ない胡蝶の説明に産屋敷や柱の面々が疑問符を浮かべるが、富岡だけは違つた。

「……お前もか」

富岡は炭治郎に質問した時はふらつく頭で意識することは出来なかつたが、それが収まつてくると同時に見るもの全てが余計な価値観や経験則を省いた正しい情報を得ることが出来ていた。

「ということは富岡さんですか」

胡蝶は自分だけではないことに安堵を覚えつつ、それならばと憶測を立てていく。

そこで産屋敷が血鬼術を疑い胡蝶に問いかける。産屋敷自身、あまりそうは思っていないが、今の所それによって何かが起きてるといふわけでもなく、そして如何せん利点が大ききように見える。

それが感覚に異常を来す血鬼術とは考えにくいが、本人からも一応聞いておく事にした。

「血鬼術では無いんだね？」

その言葉に胡蝶は首を横に振る。

「その可能性は低いと思います、理由としては掛かった側の利点が非常に大きい事と……これは憶測ですが、あの子を起点に発動する血鬼術というより、あの子自身に何かしらがあるのではないかと思われます」

胡蝶の憶測があやふやなのは先程言った感覚に頼ったからだろう。

そこで富岡が口を開く。

「……竈門炭治郎に対する未知を既知にする。それが一つの条件では無いかと思ひます」

富岡は以前行つた問答によつて、胡蝶以上にあの感覚をはつきりと感じ取ることが出来る。

「……そして恐らく、竈門炭治郎を自身の瞳で視る事がその感覚を得るための基盤となる条件であり、他の隊士よりその感覚が自身でも判るほど強く感じるのは声や匂い、そして戦い方や気配などを既知にしたからだと思ひます」

他の面々はいつも以上に饒舌な富岡を見て、多少驚きながらも何故いつもこう喋る事が出来ないんだと呆れる。

まあ単に産屋敷や他の柱の目の前だから必要最低限というわけには行かず、だからといって情報は持つてはいるが、どれを取捨選択して喋れば良いのか分からずに全て暴露

しているだけなのだ。つまりは口下手が変な形で出ただけなのである。

その言葉に産屋敷は多少悩んだ素振りを見せるが、まず炭治郎に会わないことには始まらないと考え、次の話に移る。

「そうだね……その感覚や効果は追々調べていくとして。次はその竈門炭治郎という子の対策を考えようか」

そこで富岡が挙手をする。

「……竈門炭治郎の妹が人々を襲った場合、私が腹を切つて責任を取ります。だからどうか、彼らをお許し頂きたい」

そう言つて富岡は頭を下げる。

柱の面々は驚くが胡蝶はそれに対して何かを言い出すのを迷っているようだ。富岡が何を狙っているのかは分かる。だが炭治郎について何も知らない状態ではそれに賛同しかねる。

「それに付いては手紙で送つてくれたから知っている、けれど良いのかい？」

富岡がそこまでやる必要はない。産屋敷はそれを言葉にせず、覚悟を問う。

それを分かっている富岡は、はいと力強く頷いた。

「分かった、じゃあその事について皆に伝えることがある」

此処で柱合会議で富岡が炭治郎の家に行った事が判明される。そこで行った質問の

内容等々を手紙に綴り、産屋敷に送ったのは正解だろう。

手紙には炭治郎の家に赴いたこと。炭治郎の妹が鬼であること。その鬼は特異的な存在であり不要なはずの睡眠を取り人を喰らっていないこと。もし人を喰らえば炭治郎がその頸を切り落とすと言ったこと。それらが産屋敷を通して柱の面々に伝わっていく。

だが胡蝶と富岡を除いた面々は納得していないようだった。確証が無く、真偽が不確かなためだ。

そこで胡蝶が口を開く。

「ならば私も、自身でその子の人となりを知るまではなんとも言えませんが、富岡さんの責任と一緒に背負う覚悟をしておきましょうか」

それは言外に富岡の観察眼に問題がなければ、その鬼が人を喰った場合胡蝶も同じ様に腹を切るということだった。

富岡はそれに少しだけ目を見開きながら、咎めるように。

「……胡蝶」

と声を出す。お前が付き合う必要はないと言う意図を含んだ声だった。

胡蝶はそれを微笑みながら優しい声音で話す。

「富岡さん、私だって子供にあんな事を言わせてしまった罪悪感があるんですよ？ そ

れに見逃してもらった命です。ならばその子の為に命を賭けないというのは些か不誠実が過ぎると思います」

少しばかり私に言うことがあると思いますが、と胡蝶は青筋を浮かべながらそれを付け加える。それもそうだろう。負傷はなかったとは言え貧血の症状も治まっていないのに勝手に屋敷を抜け出した挙げ句、自分の居ないところであれよあれよと話が進んでしまっていたのだから。その場にいた者として多少なりとも相談はしてほしいものだ。富岡にそれを期待するのは若干間違っているような気がしなくもないが。

産屋敷は富岡と同じ様に覚悟を問う。

「しのぶもそれで良いんだね？」

胡蝶はそれに確かな意思を以て頷いた。

本来はこの二人が此処までする必要はないだろう。だが柱にとって救えなかった後悔や自責は何度も味わっているからこそ酷く強い。それに今回ばかりは特殊だ。鬼を匿い、そして匿う者が恐ろしく強い。ならば敵対を拒むためには命を抑止力として使っても皆に納得してもらおう必要がある。

だから今回の件は、柱としての矜持であり、鬼殺隊を存続させる為の決意の表れである。知っているからこそ自らが動かねばならないという考えが、責任を取り切腹するといった行為に出ることにした。

産屋敷としては危険を冒してほしくないという思いはあるが、鬼殺隊からしても相当危険な存在であるが故に富岡と胡蝶の意見を尊重することとした。

「納得は行かないかも知れない、だけれど今回は異例中の異例。人を襲う可能性があるけど、その逆もまた然り。だから今は、どうかこの二人を信じてあげて欲しい」

勿論鴉の監視を付けておくというその言葉に、柱達もその存在が危険だということは理解するので渋々といった様子で賛同し、そこで柱合会議は終わりを迎えた。

その後富岡は無言でその場から去り、胡蝶も蝶屋敷があると言つて早々に産屋敷邸を抜けた。

残った柱たちは微妙な表情を取つていた。炭治郎のこともあるだろうがそれ以上に富岡と胡蝶の様子に違和感を覚えたからだ。

そこに産屋敷を含めた三人の会話に横から反対意見を挟む事が出来なかったのはその違和感が原因だろう。

血鬼術と言うわけではないのは分かる。だがどこか少し……浮世離れしている雰囲気纏つていた。

先の言つた感覚によつて、俗世の本質を捉え馴染めなくなつてしまつたのが原因か……その真偽は不明である。

人目を気にせぬ異常者

「はあ……」

現在彼は陰鬱である。

理由は二つある。一つ目は家族との思い出がある家を離れてしまったこと。だが鬼殺隊が定期的に来るとなると、流石に毎回毎回生かして返すのが面倒である。細心の注意を払ってはいいるが、いつ手が滑って、あるいは激情に駆られて殺してしまわないか気が気でない。そういった事故が起こらないよう定期的に拠点を変えて、場所を特定されないようにする必要がある。

二つ目は狩人の夢に禰豆子を送っていること。その所有者であつた月の魔物を狩り、現在は彼自身が所有しているが……何せ上位者が作つた代物である。日本と違い夢は神秘に溢れ、それが禰豆子に悪影響を与えないかが心配だ。神秘が色濃く残つた悪夢では自分が正常を保つていた事と、他の鬼である程度実験したから大丈夫だと思つが……まあ影響を受けた所で大した事にはならないから別にいいが。それよりも秘文字の工房道具や聖杯、その他異常物体の数々に触れないかが一番心配だ。だからといってそろそろ危険が多くなってきた気がする、鬼が出るし鬼殺隊は来るしで。ならば家で寝かせ

るより夢に送ったほうが安全だ。それに今は眠ってる上にそれらは嚴重に保管されているから問題ない。しかしそれでもなにかの弾みで触れないか心配な為、夢での世話等々は人形ちゃんに任せている。本当に頭が上がらない……

とまあ色々悩み事や心配事は尽きないが、それらは……特に後者は禰豆子が起きてから対策する方が良いだろう。それまではいきあたりばったりで放浪しつつ、鬼を狩ればいい。そうすれば何れ鬼舞辻無惨を見つけ出す事が出来るだろうから。導きを見逃してしまったのは痛い、それもまあ仕方がない。誤って人殺しをするほうが方が問題だろう。

”水の呼吸 流々舞い”

流れる水の如く移動をしながら触手を切り落とす。

彼は現在、エープリエターズ相手に呼吸の修練を行っている。呼吸自体扱えないわけではないが、如何せん素の身体能力に頼り切りなのである。全集中の呼吸による身体能力向上がまだまだ不十分だ。以前羽織を纏った二人組を視て、それに気付く事が出来た。それを改善するために水の呼吸や蟲の呼吸を見様見真似で扱い、あの二人組の呼吸の熟練度に近づけて行く。とは言えちゃんとした教えを受けたわけでもなく、全ての型

を見たわけでもなく、その上適性がないのか才能がないのか、行くところまでは行けるがあの人ほどに扱うのは到底無理でヒノカミ神楽ほど十全に使いこなせるわけでもない。だからといってヒノカミ神楽も足りないものが多くなかなか体に馴染まないのも事実。ならば今は呼吸の技術を磨くことに重きを置く。幸いなのは水の呼吸と蟲の呼吸は似通った部分があり、適時切り替えても二つの差異に悩まされないことだろう。

才能の無さに嘆くのは慣れている、あの悪夢で散々味わったことだ。

……何度渴望したことだろう。才能があればあの子やあの人を救えたかもしれない。才能があればもつと早く悪夢を終えることが出来たかもしれない。才能があれば禰豆子を守れたかもしれない。

幾度となく嘆き、悔やみ、絶望を味わい続けた。だがそれらは全て終わったことだ。悪夢を終わらせ、救うことは出来なかつたが死後の休息を齎す事が出来た。鬼になつてしまった禰豆子はこれからは必ず守り抜いてみせよう。大丈夫だ、力はある。技もある。手段も今こうして増やしている。必ずだ、必ず……

こうした固い決意の下、彼は呼吸を用いて上位者や別次元の狩人と渡り合つていく。何故いきあたりばつたりで放浪すると言いつつ聖杯に籠もっているかと言うと、単に暇なだけである。夜間はともかく、昼間は一切鬼を見つけない。最初の頃は昼間も鬼を陽光の下に引き摺り出していたが、まず見つけるのに時間がかかり、そし

て引きずり出すのはひどく手間がかかる。ならば夜間に出没する鬼を日輪刀で頸を切つて狩つたほうが楽で効率がいい。

その結論に至つた現在、昼間は意識を薄れさせて夢に帰つては禰豆子の世話や聖杯に籠もり呼吸の修練を。夜になれば地上に戻り鬼を狩る。一応懐中時計を持つていての時間は正確にわかる。悪夢で拾つたものではあるが、悪夢においてそれは意味をなさない。だがそれが夜明け、希望であると信じた人が居るのも事実。時間が解決するといふ言葉があるように時間が経てば夜明けを迎えることが出来ると信じて疑わなかつたのだろう。実際は酷くなる一方であつたが。

とまあそんな生活を続けて一年が経つた。

禰豆子は未だ目覚めず、ある日突然死んでしまいそんな恐怖に苛まれるが、禰豆子を信じ続けて己は己の出来ることを熟していく。

呼吸は狩人相手に徐々に戦えるほどにはなつた。というより狩人相手に銃器を一切使えないのが非常に厳しい。特別禁止しているわけでもないが飽くまで呼吸の修練が最優先である。銃器を使えばそれだけで型に嵌ることが出来ず、呼吸を修練するには邪魔になる。それでもなんとか動きを読み取り隙の糸を嗅ぎ取つては技を打ち込むが、それでも勝率は一割程度とあまり芳しくない。銃を余り使う必要がない巨獣や上位者相

手ならよく刺さるのだが……狩人相手となると時間が経てば経つほど徐々に型を見切られてそのまま敗北を喫する事が多い。短期決戦を仕掛けるほうがいいのだろうか……

と、今も色々悩みは絶えないが、今日も今日とて鬼舞辻を探しながら鬼を狩る。夜、浅草にて。

人々に紛れるため、装束を着込まず異邦の服を着込むことで目立たないよう鬼を探る。幸い今は和洋折衷が始まった大正時代で、都心に近い。異邦の服はあまり目立たずに行動ができる。

自慢の嗅覚を用いて鬼を探っている最中、彼の鼻があるとある匂いを嗅ぎ取る。

これは……家族が亡くなり、妹が鬼になったとわかった日に嗅いだ匂いだ。鬼舞辻だ、鬼の首魁である鬼舞辻無惨の匂いだ。その匂いによつて彼は家族の死に顔、血に染まった家内の惨状を鮮明に思い出し、脳内は一瞬で憎悪と憤怒の激情に駆られた。

彼は人気の少ない路地裏に潜み、ひと悶着を起こしても後に尾を引かないよう顔を覆い隠せる烏羽装束を身に着け、青の秘薬と加速を併用することで視認性を下げ装束を着ても目立たなく為るようにする。

屋根に登り、シモンの弓剣を構える。青の秘薬の影響で一般人には見向きもされないようだ。

匂いで大まかな位置を探り、脳の瞳で個々人を鬼か人かを暴く。見つけた。

彼は躊躇いなく変形を行い弓を引く。子供を抱えているようだが関係ない。狙いは頭だ、貫通して他者に被害が出ないよう頭に矢が残る調整をする。威力は要らない。一瞬でも矢に意識を持つていき尚且他の人々が自ら離れてくれれば万々歳だ。

嘴に仕込んだ香草と薬草により精神安定を図り、感情によるブレを無くしていく。そして射る。

即座に屋根から降りて加速で近付く。周囲は悲鳴を上げ我先にと逃げようとする、阿鼻叫喚だ。その中に紛れ、精霊の眼球を取り出し、足を狙って夜空の瞳を発動させる。

鬼舞辻は動揺した、まさかこんな町中で仕掛けてくるとは思わなかったろう。だがそれでも鬼舞辻は邪魔な重りである子供を殺しその場から離れようとするが、子供に意識を取られた所為か、上からの第二射に気を取られたか。人の間を縫い、地を這う隕石によつて膝下を砕かれ、衝撃によつて子供を手放した。

彼はその子供を奪い取り、近くにいた母親であろう人に投げ渡す。

「逃げてくれ、あの男から出来る限り離れて」

「な、何を言つて……貴方が、月彦さんを……？」

「あれを見てまだわからないのか？ あれは人間じゃない。理解できなくとも直ぐにこ

の場から離れるんだ！」

語気を強め無理やりこの場から離れさせる。

彼が指した先には足を再生させている鬼舞辻無惨が居る。その再生速度は常人から見てもおよそ人間とは思えないだろう。それを見た人々は更に悲鳴を上げ、その場から逃げ去っていく。どうやら野次馬も残らないよう、彼は安堵した。

人々で賑わっていた浅草は閑散としていき、今この場にいるのは彼こと竈門炭治郎と鬼舞辻無惨だけだった。

恐怖の苗床

彼は啓蒙も用いて鬼舞辻の本質を、奥の底まで見通す。

そして視た。彼にとって無視することの出来ない一つの事実を。

鬼舞辻が死ねば他の鬼が全て死滅する。

それはつまり、鬼舞辻を殺せば彌豆子は死ぬかもしれないということだ。その事実
に彼は苦々しく吐き捨てる。

「……悪趣味な」

「鬼殺隊を超える狂人風情が何を言うか。貴様のせいで態々擬態していた意味が無く
なってしまったではないか。場所と時間を弁えてる分鬼殺隊の方がまだましと言える
ぞ」

「そうだな、でも俺はお前を殺せさえすれば良いんだ。では死ね」

加速を用いて肉薄し頸に向かって日輪刀で一太刀加える。この程度では殺せないこ
とは啓蒙によって理解していたが……これは驚いた。たしかに刃を通した筈だが、裂傷
すら見えない。おそらく切った側から再生することで切り落とせないようにしている
のか。

だが彼にとってこの程度些末なことだ。先程の事実気付いてからは彼の目的は変わっている。

「なっ!?!」

鬼舞辻は日輪刀が振り抜かれてから漸く自身の頸が切られたことを知覚した。

そして気付いた。こいつは化け物だ。過去に対峙した忌々しい剣士と同等の。

そう結論づけた鬼舞辻は鬼の脚力を發揮してその場から逃げる。正に脱兎の如くである。だが、背を向けた瞬間に硝子瓶を投げつけられた。だがそんな事にかまっていられず、飛散する内容物をかぶりながらも少しでもその場から離れようとする。

幸い自分は鬼だ、毒薬の類いならすぐに分解できる。そう考えたのだろう。それらを無視して少しでもその場から離れようとする。

だが……

「が!?! はあ……!?!」

己の腹部から悍ましい触手が生え……いや、貫かれ体勢を崩した。再生を待つも血が流れ出るばかりで一向に治る気配がない。そしてその一瞬、再生を待ったその一瞬の隙を彼が突いた。

背骨を砕き、彼の手が鬼舞辻の体内に侵入した。彼自身はおかしな所におかしな物が存在していることに違和感を覚えたが、手は止めずそのまま其処にあるものを引き摺り

出した。

彼の手に収まつてるのは脳と、それに付随してつながったままの心臓だった。可笑しい、内臓があつたはずの場所に叩き込んだはずなのに。他の鬼はこの様に複数の脳を持つて居なかつたはずだ。

血鬼術 黒血枳棘

一瞬の思案の間、鬼舞辻は血鬼術を発動させた。彼はそれを防がず、払わず、回避に徹してすべて避ける。だが回避に徹した影響でまた逃してしまった。

彼はもう一度シモンの弓剣を取り出し、今度は足首を狙う。射角を付けることで今度は地面と足首を矢で縫い付ける為に。

先程は人命の為、力加減をしたが今回はそのばかりではない。狙いは足首と地面、被害を気にする必要はない。

そして放つ。

更に倒れて突いた手に第二射を。

「逃げてても無駄だ。俺の鼻はお前を覚えたぞ、脳の瞳はお前を視たぞ。お前がどこへと逃げようとも、地の果て世の果て地獄の果てに逃げようとも。俺は必ずお前を狩り殺すぞ、鬼舞辻無惨……!!」

爆発金槌を構えながら、一步一步と近づいていく。

鬼舞辻は底冷えする程の恐怖を感じた。ゆっくりと近付いてくる様が恐ろしくて堪らなかった。だが私には無限城がある。でもそれを以ってしても心の底から休まりそうにはなかった。それほどに彼への恐怖が脳の奥底までに貼り付き、自己を蝕んでいく。

最後の手段である自身の破裂を行うため、体を膨張させるが……

銃声が鳴り響く。

散弾が全身を貫き、行動を無理矢理止められてしまった。

漸く再生が効くようになった体での最後の抵抗で、鬼舞辻は自身を縫い付けていた矢を抜き取り彼に貫手を放つ。

「この糞餓鬼めがあああ!!」

その手が彼の腹を貫いた。鬼舞辻は勝利を確信した。これで己の血を流し込めが、いくらこいつが化け物並の力を持っていようとも必ず死ぬだろうと。

だが彼は……

「捕まえた……!」

静かに歓喜していた。顔が仮面に隠れていようが気迫だけでも分かる、この下には悪逆を貼り付けていると。

「これで心置き無くお前の腹に手を打ち込める……!!」

彼の狩人としての無慈悲な本性が顕になる。

彼は仇敵の腕を逃すまいと掴み、今度は此方が腹を貫き鬼舞辻の臓物をぶち撒ける。

「グッ……カハッ……!!」

彼は何かを探るように手で臓物を掻き混ぜる。そしてより多くの再生した臓物を掴み、それを引きずり出す行為を何度も繰り返す。

鬼舞辻はそれを引き剥がそうと自身の腕を引つ張り彼に攻撃を加える。それが彼の仮面に当たり、素顔が顕になった。齢14にしては異常なほど冷え切った目。殺意と憎悪に塗られ、凶相を浮かべた表情。額には火傷の跡。そして日輪を模した耳飾り。

鬼舞辻はその耳飾りに見覚えがあった。

「き、貴様! その耳飾りは!!」

過去の因縁が更に無残を追い詰める。無様にもそれに怯え、恐怖し、追い詰められた記憶を。

だがそんな声は自分には関係ないと言わんばかりに彼は内臓攻撃を繰り返す。

攻撃を受けては血の温もりに喜びを見出し、その繰り返しにより彼は瀕死を維持し貧者が真価を発揮させた。鬼舞辻の腕を掴む握力は鬼の骨ですら握り砕き、内臓攻撃は脳や心臓や椎骨は元より、更に多くの血を無理矢理掻き出す程に。

「ゴボッ……! ……!!」

鬼舞辻は自分の腕を切り落とし、少しでも離れようとするがそれは叶わなかった。

恐怖や怯えによって足が纏れたのか、椎骨を失って体幹を維持できなくなったのか。鬼舞辻はその場で尻餅をついてしまった。

彼がその隙を見逃すわけもない。自身に刺さったままの腕を引きずり出し、祭祀者の骨刀と感覚麻痺の霧を併用し逃げの手を尽く潰していく。

その場に甲高い金属音が鳴り響く。

彼の右手には爆発金槌が握られており、その撃鉄を起こしたのだろう。槌の部分は煙を上げ赤熱化していた。

「やっやめ」

過去の恐怖と状況が偶然にも重なってしまったのだろう、その見た目から自分の身に何が起こるか想像してしまったのだろう。前後不覚となった体は思うように動かず、逃げの手も潰された。今の状態であるときの手段を使おうものなら再生も生命維持も行えずそのまま死ぬだろう。だから無残はただそれが振り下ろされるのを見ることしか出来ない。

背筋を凍らせる程の恐怖が鬼舞辻を支配し、それを静止しようとする。が、無慈悲な

狩人である彼がそれを聞き入れるはずもなく……

両手で持ち、鬼舞辻の頭に振り下ろす。

地面に焼け焦げた血と肉と脳漿の華を咲かせる。

彼は撃鉄を起こし鬼舞辻の胸に振り下ろす。

臓物と骨が混じった血を浴びる。

彼は撃鉄を起こし振り下ろす。

家族を殺した憎悪を込めて。

彼は撃鉄を起こし振り下ろす。

妹を鬼にした憤怒を込めて。

それでも満足しないのか、彼は夢から回転ノコギリを取り出す。

丸鋸刃に棍棒を取り付け変形させると、金属が荒く擦れる音が響く。

何度も何度もそれを振り下ろし、四肢の肉を抉り切り離す。

こんな事をやつても死なないことは分かっている、妹が死ぬかも知れないから殺せないことも理解している。

ならば徹底的に痛めつけるのみ。自身に恐怖を抱かせ、己のやったことを後悔させる。

苦しめて苦しめて、生まれてきたことを後悔するまで苦しみ抜いてから殺さねば気が

済まない。だから鬼の不死性というのは彼にとって都合だった。

原型がわからないほどの肉塊となった鬼舞辻を感覚麻痺の霧を掛けつつ一心不乱に叩き潰していると、突如その場に琵琶の音色が鳴り響く。

”月の呼吸 壱の型 闇月・宵の宮”

”血鬼術 蓮葉氷”

”破壊殺・空式”

前方から月を幻視させる斬撃、後方から睡蓮を模した氷、遠くからは衝撃波が飛んでくる。

彼はそれを加速の業を使い即座に範囲から逃れようとするが、衝撃波を避けるだけに留まり胸部を浅く切り裂かれ、背面は所々凍りつく。

「早くその方をお運びしろ!!」

空間に現れた襖から続々と鬼が出てくる。瞳には上弦と刻まれており、それが六体。

上弦の壱、弐、参が彼の足止めをして、肆、伍、陸が鬼舞辻の肉片を回収し護衛しつつ襖の奥へ運び込む。

だが彼はそれを見ず見す逃すつもりはない。当たり前だろう、それらが鬼舞辻との関係が深い者ならばそれだけで憎悪の対象になり得るのだから。

……鬼達にとって幸運だったのは現段階では彼が鬼舞辻無惨を殺すつもりがないこ

と。そして不運はその鬼舞辻無惨を不必要に庇ったせいで鬼舞辻と同等の殺害対象になったこと。そして鬼舞辻のように禰豆子が死ぬかも知れないという制約が無いため、彼は躊躇いなどはしないだろう。

逃すつもりもなく、殺意に濡れた彼は更に加速を使い、襖と鬼の間に割り込んだ。そして両手を仰々しく挙げ、彼方に交信を呼び掛ける。

無残様が命の危機に瀕し、鳴女に飛ばされたと思えば……何だこれは？

そこに居たのは原型が殆ど残っていないが無残様と思われる蠢く肉塊と、異様な装束を身に纏う人間だった。

いや、此奴は……本当に人間なのか？ そいつを初見の鬼達は疑問に思う。それもそうだろう。腹部には風穴が空き、所々肉が抉れて欠けている部分もある。それに先程我々が与えた傷も見える。それでも尚軽やかに動き、私達の前に立ちはだかるのだからそれを疑うのも仕方がない。と言うより無惨様の呪いを解いた逃れ者の鬼と言ったほうがまだ納得できた。だが鬼の気配はなく、見た目の特徴もなく。只々異様な雰囲気をもとっている人間にしか見えない。

そんな奴が動く。我々上弦の鬼ですら目では追えない程の速度で襖に割り込んで両手を上げる。

このままでは不味いと本能で直感した。鬼になって久しく感じてなかった生存本能。あれは不味い、近づくな、触れるな、避けるかと疑問の余地を与えないほど強く警鐘を鳴らす。

鬼達はその本能によって助けられた。いつも以上に強く後ろに飛ぶことで、鬼の脚力も相まって範囲外へと逃れることが出来たのだ。

それから数瞬の後、言いようのない嫌悪感を覚える小爆発が奴の周囲にばら撒かれる。本能に従って正解だった。あれの爆風の残滓だけで肌には焼け付くように痛みが走る、直撃を食らえば一溜まりもないだろう。あれからは理外の血鬼術以上の悍ましさを感じた。

と安堵するのも束の間、奴に目を向けるがそこには奴の姿がどこにもなかった。

逃げたかと思ひ、周囲に目を遣り気配を探る。

だれも……いや、違和感が……ッ!?

「避ける!!」

無残様が再生するまでの間、若しくは無限城に戻るまでの間護衛している肆、伍、陸に向かつて叫ぶ。その鬼の背後に奴が居た、気配は酷く薄く、実体すらばやけて見える。

奴は日輪を見紛う鬨気を纏っていた。その鬨気を携え、虚無からは日輪刀を居合の様に抜き放ち……

”ヒノカミ神楽 日暈の龍 頭舞い”

龍の如く畝る剣閃によつて陸、伍、肆の頸が切り落とされる。

その呼吸、その太刀筋に壱は見覚えがあるようだ。

「その呼吸……太刀筋……まさか」

そしてそれによつてほんの一瞬、刹那にも満たぬ一瞬だけ動揺を表す。

奴はそれを見逃さなかつた。

”ヒノカミ神楽 幻日光”

先程と同様の高速移動に加え残像を残した歩法。

それによつて壱は懐に入られるといった失態を犯すも、動揺が一瞬であつたため即座に反応し迎撃を行う。

”月の呼吸 参ノ型 厭忌月・銷り”

互い違いの三日月を模した斬撃。

奴はそれを屈んで回避し回転。

”ヒノカミ神楽 斜陽轉身”

宙返りから放つ横薙ぎの一閃。だがそれは壱の喉元を切り裂くに留まり、頸を落とすことは叶わない。

そして宙返りをする性質上、二の太刀を入れることは出来ず、離れる隙を与えた。

その数瞬の出来事を間近で見た、頸を落としたりはずすの肆が恐慌状態に陥り腰を抜かしながら分裂体を盾にし、地を這いずりながら逃げる。

その肆が叫びながら言った。

「ヒイヒイヒイ！ ば、化け物お!!」

その言葉を聞いた奴が、動きを止める。刀に纏った烈火は鳴りを潜め、とめどなく溢れ出ていた殺気や憎悪は一瞬にして収まる。

「……ばけ、もの？ 化け物、化け物だつて？」

奴はそれを反芻するようにその単語を繰り返す。

「お前等人を喰らう獣以下の畜生共が、言うに事欠いて私のことを化け物というのか？」
奴が刀を下ろした。

……今ならば、無残様を無限城に送り届けることが出来るかも知れない。

「……それも……そうか。私達は人を狩り、獣を狩り、上位者を狩る。そんな狩人が只人であるはずもない」

戦意が消えた、今ならば……！

”殺せ!”

無残様の細胞が悲鳴を上げ、脳に直接声が届く。

”今殺さなければ鬼殺隊以上に私の驚異となる！ 今しかない！ すぐにでもその

餓鬼を首を穫れ!!”

……命令が下された以上は、我々は動かざるを得ない。

各々が武器を構える。

そこで先陣を切ったのは上弦の参、猗窩座だった。

”破壊殺 滅式”

猗窩座は直撃を確信した、この状態ならば避けることは叶うまいと。

だが、猗窩座は確信した瞬間に見た。奴が此方に銃口を向けているのを。

銃声が鳴る。

(誘われたか?! いやそんな事はいいい、早く体勢を……い！)

猗窩座は銃弾を体の芯に受け、膝を崩した。激痛が走る。全身が痺れたように体が動かない。鬼である自分ならこの程度造作も無いことだと言うのに。

奴の手が迫る。鋭い爪を持つ獣のような手が。

ぞぶりと、それが腹部を貫き、内臓を掻き混ぜる。

「だからどうした」

奴がより洗練された殺気を滾らせ、口を開く。先程の様子が嘘であったかのように。「この世に遍く獣を全て殺し、狩りを全うすることが私達狩人の使命だ」

臓物が引き摺り出される。腹の内側には爪痕が残り、再生が非常に遅く感じる。

「鬼舞辻無惨を殺し、家族の仇を取るのが俺の、竈門炭治郎の役目だ」

”ゲールマンの狩りを知るのが良い”

耳元で囁かれたような気がした。これが幻聴だというのは理解している。だが奴の殺気がそれを脳に錯覚を起こさせる。

今此処でその囁きに導かれて振り返るような隙をさらせば、即座に頸を落とされるだろうというのは殺気が物語っている。だから囁きがどれだけ悍ましく、不愉快極まりなかったとしても否が応でもそれを無視せねばならない。

いままで死ぬ寸前まで鬼に対して怨嗟を吐き出す人間を見てきた。だがそれは死にゆく者の戯言であると無視していた。だが此奴はどうだ？ 一瞬でも気を抜けば死ぬであろう。先程の囁きが呪詛のように脳の奥底へ貼り付き、死に対する恐怖が思考を徐々に鈍化させる。緊張が肌を突き刺し、筋肉を強張らせる。鬼となり、上弦となり、死から程遠い存在になったことが此処で裏目となる。

「お前達上弦に恨みや怒りは無い。けれど、世に仇なす悪鬼である以上、鬼舞辻無惨に近い鬼である以上、お前達を狩り殺し、必ず頸を穫る。それを成すのに、人か化物かは関係ない」

日輪刀は赤黒く染まり、おどろおどろしく血が溢れ出す。

”血の呼吸 古狩人の訓戒”

全集中 血の呼吸。

水の呼吸から派生した数ある全集中の呼吸の一つ。日輪刀に自身の血を這わせることで血質補正を付与することを可能にした。千景を思わせるその業は女王の血に焦れた故か、それとも……

変形を行えず、血石や血晶石で強化できない日輪刀の、呼吸法による唯一の変形方法であり強化方法である。

そこからは、熾烈を極める戦いだった。

本来狩人にとって多人数を相手にするのは好ましい状況ではないが、鬼舞辻への怒りや殺意に染まった彼はそんなものお構いなしに身を投じる事になる。それに鬼どもには連携をするという脳が無い。それもそうだ、上弦ともなれば一対一、若しくは一対多という状況が多く、強者故に連携を取るような相手が全くと言って程にない。そうともなれば目まぐるしく敵を変えるだけで一対一と何ら状況に違いはない。経験の無さ故に同士討ちの可能性がある分、狩人を相手するよりましではある。

警戒すべきは背後からの奇襲と広範囲技による波状攻撃だろう。それも発達した嗅覚と卓越した回避技術によって対処が可能となる。

あらゆる要因が噛み合い、彼を独壇場に持つていった。

強者を複数相手取るのはヤーナムの影や別次元の狩人との戦いで慣れている。連携が出来ないならばヤーナム市民の方が手強いとすら思える。

そして鬼共が銃弾を目で追えず、避けることが出来ないならば。痛みで少しでも行動を鈍らせるなら。自身に恐怖を抱くというのなら。同士討ちの可能性があるなら。明確な弱点があるのなら。

殺せばそれで終わりなら。

どこまで行こうと、どこまで膂力が高かろうと、どこまで技量が優れていようとも、どこまで血鬼術が優秀であろうとも。彼からすれば鬼だろうが上弦だろうが、自身と同じ狩人や上位者を相手取る事と比べれば大した事ではない。立つ土俵が違うのだ。

仮に弾丸を目で追い防げたとしても、彼は避けられるような、もしくは防げるような状態にある相手に銃を撃つことはない。狩人特有の動体視力と反応速度で、彼自身の嗅覚による隙の糸や筋肉の弛緩を嗅ぎ取り、体感で数十年と地獄のような悪夢で戦い続けた経験で。相手の初動を見切り、銃を撃つことで被弾せず、尚且相手の体勢を崩す。そこに一切の淀みはなく、一つの完成された業だった。

堕姫から分裂した妓夫太郎が、鎌から操る事のできる血の斬撃を飛ばそうとする。この状況でも互いの隙間を縫い、相手に攻撃を与える事が出来ると判断したのだろう。そ

れは間違いではないのだが、遠距離から相手の体勢を崩せる彼相手には正解とも言い難い。

攻撃の予備動作を取った妓夫太郎相手に彼は隙の糸を嗅ぎ取り、跳弾を駆使して水銀弾を当てる。銃というまだ見慣れたとは言いがたい武器で、跳弾という技術を使われては庇う事や防ぐことは出来ないだろう。息をつかせぬほどの連携をできていれば銃などで撃てなかつただろう。彼の業と僅かな綻びが好機を引き寄せた。

彼は即座に鬼の間を加速の業ですり抜け、妓夫太郎に肉薄し、逃さぬよう腹を貫き椎骨を掴んで頸を切り落とす。

……だが

罇が入る音がした。彼はそれを無視し、一体でも殺そうと力を込める。

刀が折れる。

……仕方ないことだ、彼がこの刀の整備に使用していたのは工房道具であつて、それは本来仕掛け武器を修復するもの。日本刀の整備には適していない。そして先程から鬼舞辻の頸を一回、上弦の壺を一回、肆、伍、陸の頸を連続で切つた。道具の違いによる整備不足と、連戦に次ぐ連戦による無理が祟つた。

刀は中程から真つ二つに折れ、片方は手元に。片方は妓夫太郎の頸に残っている。

刃は頸椎によつて止められ、頸を落とすことは叶わなかつたようだ。

だが彼は焦らない。即座に日輪刀を夢に仕舞い、先程血に歎びを見出して得た生きる意思を水銀弾に変える。

鬼の攻撃を掻い潜りつつ、彼は仕込み杖とある砥石を取り出した。

水銀弾を触媒にし、仕込み杖を振るいその砥石に擦り付ける。

刃を仕込んだ硬質の杖が徐々に色が滲むように変色していく。複数の絵の具を混ぜたような汚れた黒色、だがそれはまさしく色変わりの刀であった。

彼が態々日輪刀を砕いていた理由の一つはこれだった。砕いた日輪刀と樹脂、そして自身の血を混ぜて焼き上げた所謂研削砥石と呼ばれるものを作っていた。

仮称日輪砥石。水銀弾を触媒にし、仕掛け武器に日輪刀と同じ性質を付与する秘儀である。

だがこれは欠陥品。様々な色に変色した日輪刀を混ぜたが故に汚れた黒色に変えてしまう。作成に関する技術や設備が無いために仕上がりには粗が目立ち、武器の摩耗を早めてしまう欠点がある。だがこれを利用してすることによって狩人にとって扱い慣れた仕掛け武器を鬼狩りに使うことが出来る。

さて、ここからが彼の、いや狩人としての本領発揮である。変形する仕掛け武器を構え、獣狩りの銃器を携える。これこそが狩人の得意とする戦闘であった。

斬つては避け、避けては斬り。武器が破損する直前になれば替えて再度砥石に擦り。

時には荒々しく、時には洗練された流麗な動きで。

肉を削り、内臓を抉り、鬼舞辻の血を掻き出して鬼としての力を弱める。

最初に伍の頸を切つてからは数は減つておらず戦況は拮抗しているように見えるが、その実徐々に彼の方へ傾いている。彼は肉体的にも精神的にも一切疲弊せず、一方鬼も同条件ではあるが無理矢理血を吐き出され肉を、組織を、細胞を引きずり出され徐々に力を失っている。その上鬼舞辻の命令により彼を殺さなければならなく、決定的な弱点と為る日の出までに決着を付けなければならぬ。仮に今ここで殺すことが出来たとしても、死が悪夢であつたかのように目覚めを繰り返し、本質的に殺すに至ることが出来ない。本質的に殺す事が出来なければ再度また命を狙つてくるだろう。

この戦いは彼が彼（龍門炭治郎 狩人）である限り、そして上弦（世に仇なす敵）の鬼が悪鬼である限り。最初から鬼には勝ち目など無い。

残る道は二つ。

彼に挑んで果敢に死ぬか。

敗走して鬼舞辻に殺されるか。

彼の武器が尽きるのは期待しないほうが良い。血晶石集めの一環で多種の武器で試行錯誤、及び補助武器として「異質の」や「失われた」武器を多数所持している。日の出までには充分持つだろう。そして今までの被弾は殆ど貧者の為の調整であり、武器を

頻繁に変える今、貧者調整をする必要がないため態々被弾するような真似はしない。

鬼共は焦る。多勢に無勢であるはずの状況なのに一向に殺害できず、少しでも油断や隙、余裕を見せれば刃が頸を落としに掛かり、拳を腹部に叩き込まれて鬼としての力を失う。

攻めに回れば銃によって体勢を崩されてから内臓攻撃を受け、守りに徹すれば徐々に削られ、裂かれ、叩き潰される。内蔵攻撃の隙を狙おうにも、彼は鬼を盾にして攻撃を防ぎ、獣の咆哮によって近づぐことさえ困難にする。

……空が白んできた。

徐々に夜明けも近くなり、上弦だけでなく鬼舞辻にも焦りが見え隠れする。

「貴様らは一体何をやっているんだ……!? 何故こんな餓鬼一人に梃子摺る!? 力を与えてやったというのに使えん愚図共め……!!」

感覚効果の霧による回復阻害に悪戦苦闘しながらも漸く再生し終えた鬼舞辻の目には、自身にとつての都合の悪い惨状が目に入る。

片や与えたはずの傷が消え、五体満足で地に足を付け殺気を滾らせ今か今かその素っ首を付け狙う狩人。

片や満身創痍で再生力が発揮されず、力を失い飢餓状態に陥った欠けた上弦の鬼。

「つち、夜明けが近い……!! 鳴女え!! ……二度会うことはないだろう、竈門炭治郎。

精々寿命で朽ち果てているんだな」

そう捨て台詞を吐きながら、鬼舞辻や上弦の足元に襖が開き落ちていく。だが彼は閉じる瞬間に斧をねじ込み、無理やりこじ開けた。

「神や仏はお前を赦しても、俺や人間はお前を許しはしないぞ！ 鬼舞辻無惨！！」

そう言い、手を前に突き出してエーブリエタースの先触れを発動させ、鬼舞辻の全身を貫く。鬼には大した攻撃力を持つてはいないが挑発する分には十分だろう。

そしてそのまま襖から離れ、無限城へと入らず地上に戻る。一体しか殺しきれなかったのは惜しいが別に今すぐにとまでは行かなくてもいいだろう。それに流石に敵の本拠地に戻り込むには武器も心もとなく、また準備も不足している。乗り込むのは禰豆子を人間に戻してからだ。仮に引きこもって二度と出なかつたとしても無限城は啓蒙で捉え本質を見極めた。狩人の夢と上位者としての力を使えば何れこじ開けることも出来るだろう。誘い出す方法だっていくらでもある、だが今はその時じゃない。

後に残ったのは陽光によって蒸発していく鬼の血と臓物、そして異国の装束を身に纏う赫灼の狩人だけだった。

幕間 戦のその後 胡蝶しのぶの場合

場所、蝶屋敷にて。

胡蝶しのぶは修練場で鍛錬していた。その表情は焦燥からか鬼気迫るものであった。加減をする程の余裕が無いのか、所々の床板は踏み抜かれており、それでも尚軽やかに舞い足を取られることもなく技を繰り出している。

力強く、且つ軽やかに。その速度は以前鬼を匿う彼と戦った時と比べ物にならない程の速度を出している。

彼女の脳裏には常にあの言葉が張り付く。

『来るのが一年遅い』
と。

その言葉が常に罪悪感として重くのし掛かり、彼女自身の体を突き動かさせている。あのような子供を生み出してしまった事実が鬼殺隊としての、柱としての矜持が許さなかつた。

幸い彼女には類稀なる強者との戦いを経て、己以上の技を見て、鬼との戦いでは到底得難い貴重な経験が無償で得る事ができた。

そして何より、以前柱合会議で話題に出した脳の感覚が、彼女に最適な筋肉、関節、そして呼吸の使い方を教えてくれた。

この鍛錬を続けていく内に彼女は以前より技の切れや呼吸の練度が飛躍的に良くなり、大きく身体能力も上昇した。

だが、其れでも彼女は止まることはない。何かに追われる様に、何かに責められる様に。彼女は止まることなどせず、常に全速力で前に進み続けるだろう。

それを見た蝶屋敷の住人は、酷く心配していた。

柱の任務、薬剤の調合、患者の手当て、そして度を超えた鍛錬。

いつ過労で倒れてもおかしくは無い状態だった。開いた時間を殆ど鍛錬に費やし、いつ寝ているのかもわからない。

幸い調合の調子が良いのか、以前よりも効果が高く、手早く済ませる事が出来ているのだが、早く済んでできた時間を更に鍛錬に費やしてしまうのだった。

その様子を見た住人達はなんとか止めさせられないか苦心した。

体の心配をしてみれば「ちゃんと休んでいる」「限界は自分がよくわかっている」と言われ、彼女の作業を少しでも減らす様に手伝いをして、作業が減れば減るだけそれだけ長く鍛錬に注ぎ込んでしまう。

用事や遊びに誘えば、付き合ってはくれるが其れでもやめない。

最終的に「体を壊すからやめて欲しい」と懇願や泣き脅しをしても彼女はのらりくりと躲してしまう。

それでちゃんと限界を見極めて、必要最低限休んで本当に体を壊さないのが尚質が悪い。

今は大丈夫だろう。だがこの状態は鬼をこの世から滅殺するか自分が死ぬまで続けるだろう。そうなれば必ず何処かで綻びが出来る。肉体的にか、精神的にか。それは分らないが、鍛錬により肉体を酷使し、自責によつて精神を追い詰め続ければ必ず何処かで壊れてしまうだろう。そうなれば遠かれ近かれ、最後に待つのは酷使した代償の早死か、自責が肥大化していき精神が潰れてしまうかの二択であった。

だから何としても止めさせたかった。

……以前言った様に彼女が浮世離れをしてしまったのか、他者の説得が通用しなくなつてしまいい他人の心情の機微に対して非常に鈍感になつてしまった。

よく言えば必要以上に踏み込まない。悪く言えば他者に対してあまり関心を持たなくなつてしまった。

だからなのか、彼女は一切止まることもなく常に前へ進み続けるのか……

住人達の心配は絶えない。

幕間 戦のその後 富岡義勇の場合

富岡義勇は幽鬼の如く、ふらふらと鬼を狩り続ける。

その足取りには覇気がなく、されどその顔や気迫は鬼を怯えさせるほどであった。脳の啓きを得る感覚が鬼の居場所を即座に割り出し、最高効率で、瞬く間に鬼の首を刈り取る。

朝になれば藤の家の世話になり、逢魔が時にはその家を出て、指令も当ても無いが、脳の感覚に従って鬼を狩り続ける。

此処で幸運だったのは、感覚をあるがままに受け入れ利用する事が出来ている事だろう。拒絶すればする程、如何様にも逃れられぬ感覚が恐怖を生み、近い内に気が触れてしまうだろう。それは胡蝶しのぶにも言える事だった。

彼は今、腹部に深傷とはいかない物の継戦不可になる程の傷を負った。

鬼を殺し切る事はできたが、それでも彼の思考は重く深い。

深追いしすぎた。油断した。他の奴なら上手くやれたはずだ。俺じゃなければ……

鬼を滅殺する事に集中し過ぎて視野狭窄に陥っていた。その上大した休養を取らず、

他の負傷を闘う上で問題ないと割り切り最低限の処置で鬼狩りを続けていた事が祟ったようだ。

姉と友の死が責任として重くのし掛かり、追いつきをかけるように感覚が肉体と精神に鞭を打つ。炭治郎の言葉も、彼を此処までさせるもう一つの要因だろう。

そして彼は立ち上がる。傷を呼吸と筋肉を引き絞る事で無理矢理止血し、そのまま次の鬼を狩るために、覚束ない足取りでまた脳感覚に頼りに山奥へと消えて行く。

目が覚めると清潔な寝台に寝かされていた事に気付く。

蝶屋敷のようだが……何故此処に？　と言う疑問が湧いたが、それはすぐに解決した。どうやら自分は夜明けを迎えた瞬間に倒れてしまったようだ。徐々にその時の記憶が蘇る。

あの後も鬼を殺して、殺して、殺し続けた。その無理が祟ったのか、それとも貧血を起こしたのか。

ともあれ、此処まで運んで来てくれた人物に感謝しながら身支度を進めて行く。が「目が覚めましたか、富岡さん」

扉から胡蝶しのぶが入ってくる。

「……胡蝶か、傷の処置、感謝する」

そう感謝を述べつつ身支度を進めようとするが。

「まだ完全に回復した訳では無いのですから、横になつていて下さい」

と言う言葉と共に腕を抑えられた。以前よりも力が強く、思いの外抵抗された事に驚く。

胡蝶は呆れと共に言葉を溢す。

「まだ傷も完全に塞がつている訳じゃありません、それにその状態でまた同じような事を続けなければまた過労で倒れますよ？　なのでまだ休んでいて下さい」

彼は暫しの思慮を巡らせた後、言葉を発する。

「……休むべきなのはお前もなんじゃ無いのか」

胡蝶は多少驚いた物の

「倒れるまで動き続けた貴方に言われたくありません。それに自分の限界は自分でよく分かってます。なので貴方とは違いちゃんと休んでいるので大丈夫です」

と反論する。

彼はそれに納得こそしていないが、これ以上言っても無駄だと悟り、早々に切り上げる。

「……そうか」

「そうです……って何してるんですか？」

反論中に手が離れたことをいい事に身支度を進めている富岡に胡蝶が反応する。

「大丈夫だ、次は同じ失敗しない。だから問題ない」

聞き分けの無い富岡に、徐々に胡蝶の怒りが溜まって行く。

「次は失敗しないとかじゃ無いんです。私は今休めと言っているんですよ、分かりますか？」

「だが」

胡蝶は二の句を遮るように言葉を重ねる。

「だがじゃありません、せめて傷が塞がるまでは大人しくして下さい。いいですか？ 理解したならさっさと刀と隊服を置いて横になって下さい」

圧を飛ばされ完膚なきまでに言い含められた富岡は渋々寝台に戻るのであった。

幕間 血戦

「来い！ お前らなんかに禰豆子を殺す資格は無い！ 来るのが一年遅いぞ間抜け共
!!」

その言葉を皮切りに、各々は武器を構え直す。

〃水の呼吸 蜂牙の舞 真摩き〃

胡蝶は速度、奇襲性を重視した一突きを見舞うが、彼は半身になることで突きを避け、避けた時の勢いを殺さずそのまま回し蹴りを放ち、家の外へ蹴り飛ばす。

「っー！」

咄嗟に反応した胡蝶は地面から足を離し、己と奴の回し蹴りの間に脚を割り込ませることで膝と股関節の反動を利用し受け流したが、それでも尚重い。地面から跳ばず、脚で衝撃を受け流せなければ、その一撃で戦闘不能になってもおかしくなかった。

「胡蝶！」

〃水の呼吸 肆ノ型 打ち潮〃

寄せては返す波の如く、淀み無き剣筋で富岡は炭治郎に斬りかかるが、初撃を短刀で弾かれ続く二撃目を長刀で受け止められた。

その頃胡蝶は受け身を取り再度戦線に戻ろうと脚に力を込めるが、眼前に飛来してきた短刀に焦り大きく仰反ることで回避した。

見れば奴の手元にはもう短刀が無く、長刀で富岡と切り結んでいた。

富岡の攻撃を弾き、胡蝶が反撃に転じる間に、奴は即座に牽制の一刀を放った。

武器を手放す胆力、胡蝶の場所を察知できる観察眼や予測能力、刀と言う投げ辛い物を正確に眉間へと飛ばす技量。それらを富岡の相手をしながら瞬時に判断し、寸分狂いなくやつて見せた。

…… それも胡蝶が避けられる程度の手加減を施しながら。

奴は空いた手で長刀を掴み、両手持ちに切り替えた。そして同時に大きく踏み込み力技で外に追い出す。それに対し富岡は一瞬だけ渾身の力で押し返し、即座に攻撃範囲から逃れる為に後退する。このまま押されて仕舞えば相手に優位な立場を与える為、相手突き放し攻撃範囲から逃れた方がいいと判断した。だが、奴は追撃で大きく斬り払い、富岡をさらに後退させた。

…… 奴は戦略の立て方も上手いと来た。後ろ手で戸を締める奴を見てそう思った。富岡が下がると知っていて態と受け止め、力技で押し返したのだと気付いた。奴は心理戦にも長けていたのだ。目標である鬼から距離を離され、歯噛みしながらそう思った。

非常に戦い慣れている事がわかる。鬼の様な血鬼術に頼らず、純粋な技量と正確な判断だけで鬼を護りながら柱相手に一對多を制して見せた。

柱達は勝ちの見えぬ相手に焦燥感を覚えると同時に怖気を感じた。

何故、何故これ程にも幼い子供が酷く戦慣れをしており、凡そその齡では得難い程の技量を持ち合わせているのか。疑問や好奇心よりも恐怖が勝る。奴に何があつたんだ、と。

己の身に降りかかつてる訳もないのに、酷く恐ろしく思える。

だが我々は引くわけには行かない。鬼を滅殺するまでは。

何故ここまで鬼に執着するのか。それはここで逃した後に犠牲者が出る可能性を看過できないからである。

鬼殺隊として、そして柱としての責任感の強さが撤退を許さなかった。それに、もう戻れない所まで来てしまった。奴も我々を逃す腹積りは無いだろう。

一縷の望みに賭けて、柱達は覚悟を決めた。

奴は失った武器を補填する様に空虚から鞘付きの刀を取り出し、その刀身を抜き放つ。

その武器は西洋を思わせる柄や鍔の意匠に、薄く鋭い日本刀の様な刀身が付いていた。

先程と同じ様な変形機構を有しているのかと警戒したが、それを使う様子は無い。先程と同じように二刀流で戦うようだ。

何度も剣戟を重ねて行く。傷を負うのは此方ばかりだ。息吐く暇がない程に連続して交互に型を繰り出しても、ほんの僅かな隙ですら咎めていき、避けながら反撃を貰う。同時に前後、若しくは左右から攻めたとしても片手で対応されて、有効打を与える事ができず全て躲され、弾かれ、受け流される。それによつて綻びが生まれ、体勢を崩した際にさらなる反撃を貰っていた。

傷一つ付けられない上に手加減されているのがありありと分かる。うける反撃は決して浅くはないが深くもない、戦鬪不能や致命傷になる様な負傷も無く、ただ徐々に継戦を不可能にして行く。それに最初に使つた銃も今は一切使っていない。

…… 胡蝶が先に膝を突く。体重が軽い分、体内血液量も少なく貧血を起こしやす
い。とは言え富岡も限界間近だ。一人になった事により、相手の攻撃が苛烈になり、受けるにも避けるにも五体満足でも厳しい上、今の状態では無理に等しい。

そして死力を振り絞つた富岡も直ぐに地に伏せ、意識を失つた。

胡蝶は僅かに残つた意識で奴に問うた。

「なぜ……貴方は……それ程までに……」

そう言い終えるとそのまま意識を失つた。

奴はそれを一瞥し、無言で武器を仕舞った。
こうして、異端者である竈門炭治郎が勝利を収めたのであった。

邂逅

「どうか、私達に力を貸して下さいませんか？」

目の前には麗しい女性と一人の従者らしき男性が頭を下げている。

「え、あ、いや、そのー」

しどろもどろになる炭治郎。

何故こうなつたか遡る事数時間前。

彼は鬼舞辻との戦いで派手にぶつ壊した（ぶつ壊された）街を復興並びに精霊の瞳や彼方への呼びかけによって残留した神秘の除去を行なっている。勢いで使つたとは言え、夢ならば兎も角現世で神秘を残すなど、その地域に腫瘍を生み出す様な物である。次は気をつけると反省する反面、使用を止めようとはしないのは狩人らしい彼であった。

人払いが続いてる間に神秘の除去を終え、その後は戻ってきた人達に紛れ、街の復興を手伝っている。因みに8割は鬼の攻撃によって破壊され、2割は彼の呼びかけによつてぶつ壊されている。

そして空いた時間には武器から日輪砥石によつて染み込んだ神秘を取り除き、修復及び整備を行なっている。

そんなある日の夜だ。復興や修理も大方終わり、そろそろこの場を離れて放浪と鬼狩りを始めようと身支度を始めたその矢先。

「貴方が、狩人様ですね」

鬼が、現れた。

いや復興中も鬼がいる事は分かっていた。ただ匂いが酷く薄く、隠れるのが上手いのか中々位置の特定が難しかった。

ただまあ犠牲者も出ておらず、大した動きもして無いことから、探し出すのは復興が終わつてからでもいいと思つていた。

そしていざ探そうと動き出す直前に現れた。

ここで冒頭に戻る。

その鬼は人に擬態してるが、脳の瞳が奴を鬼と嘯いた事もあり、即座に臨戦体勢を取つていた炭治郎であるが、想定外の行動と今まで見てきた物以上に強く輝く導きに彼らしからぬ驚きと焦りを見せる。

つい癖で武器を向けてしまつたが、よくよく見ると強い導きと禰豆子に近い——人を喰らつていない鬼と近い——性質を持つていた。まずはここで焦りが出る、やつてし

まったと。

そしてその後には此方が武器を向けたにも関わらず無防備に頭を下げ、協力を申し出たのだ。嘘の匂いもしない。

鬼側から協力を申し出た事もそうだが、武器を向けたのに敵対しない事実が彼を驚愕に染めた。それもそうだろう。狩人からすれば武器を向けずとも殺し合いをするものだ。なんだかんだ言って炭治郎も狩人としての常識に染まり切っていた。

相手が一般人ならまだしも、鬼相手は基本的に接触即ち敵対なので彼は普通に驚く。

「あ……………」

気まづくなつた彼は武器を夢に仕舞い、頭装束を外す。

「……………もしかして見てました？」

言葉には出さないが先の戦闘の事だ。その時は激情に駆られ、気付く事もなかったが今思うとほんの微かではあったが視線を感じていた……………気がする。鬼舞辻や上弦を相手していたとは言え彼らからぬ失態である。もしその視線の主が敵意があれば十中八九攻撃を貰っていた。それ程までに隠れるのが上手いと思った。

「ええ……………そして貴方が普通の人間でない事も知っております」

「……………」

（困つたな……………鬼とは言え人を喰らつてない様だしこの導きを逃すのは非常に惜しい。

とは言え人間でない事を知られてるってのは……うーん、本格的に困ったぞこれは）
その懸念を読み取った女性はさらに言葉が続ける。

「安心してください。私達は逃れ者と呼ばれ、鬼舞辻から追われる身。情報を漏らす相手も居りません」

彼にとつてはそれだけでは無いのだが……鬼舞辻と口にした事から呪いもない様子だし、嘘の匂いもしない事から誠実な人？ 鬼？ だろから信頼しても良いのだろ
う。

「分かりました。私の力で宜しければお貸し致しましょう」

彼がそう言うのと女性は安心した表情をとり

「有難う御座います。そう言つて頂けると心強い」

再度頭を下げてきた。

「頭を上げてください。では、改めて自己紹介をしましょう。竈門炭治郎と言います。力を貸すと言つても鬼を狩る事くらいしか出来ませんが、それでも良ければ存分に使つてください」

「私は珠世と申します。隣にいる子は愈史郎、どうか仲良くしてあげて下さいね」

そう言われ愈史郎の方に視線を向けるが

(……無理だなこれは)

凄んで来る愈史郎を見てそう思う。

敵意というわけじゃないのはわかるが……なんだろうか、下の子に構っていた時の竹雄や花子が出していた匂いだ。

嫉妬心、だろうか。そうかそういう事か！ 俺に嫉妬してるという事は愈史郎さんは珠世さんのことが好きなんだな！

と、一人勝手に納得していた炭治郎であった。

場所、無限城にて。

くそ、くそ、くそ！ なんなんだあいつは!!？ この私が恐ろしいだと？ ふざけるな！ 私は究極の生物の筈だ。何故あんな餓鬼に恐怖を抱かなければならない！

そもそも何なんだあの強さは、理外の化物そのものではないか。あの剣士と同等以上なぞ考えたくも無い……悪夢だ。悪夢でしか無い。くそ！ やめろふざけるな！ これが天罰だと？ あの様な化物が二度も産まれて良い筈がない！

悍しい、穢らわしい化物が剩え私の敵だと？ 何故だ、何故……私があの様な化物に手を出す筈もない……

ああああああ私を見るな！ その様な目で私を見るな!!？ やめろ！ やめろやめろやめろ！ 暗い夜空の瞳で私を見るな！ 深淵の様な穴から私を覗くな!!？

宇^理は、
宙^外の
神^化!!?

々物

な

ぞ

知

り

た

く

な

か

っ

た

!!

解放

珠世邸にて。

炭治郎は珠世達が人を喰らってない事に疑問を持つ。禰豆子は未だに眠っているため、まだ分かる。だがこの人達はこうして活動しているが他の鬼の様な匂いがしない。

……こういう時に啓蒙が役に立てば良いのだが、この瞳は見えない真実を可視化する事と秘匿された物を暴く事くらいしかできない。知識を得る事に関しては、瞳の数が行き着く所まで行ってしまったため理解不能な言葉で意味不明な知識を嘯くだけなので唯々使えない代物になってしまった。いやまあ理解を示せばある程度分かるが、今の自分では気が触れてしまいかねないのであえて無視している。と言うか禰豆子を通して鬼の特性を知ろうとした時に、加減が分からず使った為に一度鎮静剤の世話になった。

出来ればもう使いたく無い。以前ならもう少しまともに使えた筈なのだが……

「珠世さん達は人を喰らってない様子ですけど、大丈夫なんですか？」

「私は、私の体を随分と弄っていますから人の血を少量飲むだけで事足りる」

「血を？ それ……」

それに体を弄つてるとなると禰豆子には無理なのだろうか。

「……不快に思われるかも知れませんが、金銭に余裕が無い人から輸血と称して血を買っております、勿論彼らの体に支障が出ない量です」

どうしようも無くなった時の最後の手段として覚えておく事にした。出来ればそんな機会がない事を祈るが。

他にも聞きたい事がある。

「もう一ついいですか」

「何でしょう？」

「鬼を、鬼になってしまった人を、人に戻す方法はありますか？」

これは彼にとつて最重要な事だ。今まで探し続けていたが鬼自体あまり情報が出回っていない。啓蒙も余り役に立たない。敵対して来る鬼が答えるとも思えない。無理矢理吐かせようにもそもそも知らないなら意味もない。だから鬼であり、自身の体を弄つた事から考えると鬼に詳しいであろう珠世に聞く事にした。

「鬼を人に戻す方法は、あります」

僥倖、それは正しく彼にとつてはこの上ない程に僥倖であった。これで妹を治せる。これで鬼舞辻を殺す事ができる。これでこの世でも狩を全うすることが出来る。

「どんな傷にも病にも、必ず薬や治療法もあるのです」

だがここで珠世に疑問が一つ浮かぶ。

「それを聞くと言う事は何かしらの理由があるのでしょうか。差し支え無ければ御教え頂けませんか？」

珠世からすれば彼は鬼殺隊でなくとも鬼を狩る立場にある筈だ。先の戦闘を思えば鬼に慈悲や同情を掛ける人物では無いようにも見える。ただこうして会話ができる事から話分かる人間ではあるのだろう。

だからこそ珠世は疑問に思ったのだ。何故、と。

「これから協力して行く身です。俺の妹の事情を話しておきましょう」

こうして彼は夢から未だ眠ったままの禰豆子を、珠世が用意した寝台に運び、事情を説明する。

「成る程……人を喰らわずとも凶暴化せず、本来鬼に不必要な睡眠を取る、ですか。もしかすると、この奇跡が鬼を人に戻す糧になるかも知れません」

彼は禰豆子の頭を撫でながら珠世の話聞いていた。

よかった。本当によかった。先も見えず、見込みもわからない状況から一步前進した。例えばそれが小さな一步だとしても、溜飲が降りたのは間違いない。

（大丈夫だ禰豆子。お兄ちゃんが必ず治してやる。だからせめて、せめてそれまでは眠っていて欲しい……遺恨を残さず人として生きれる様に……全て悪い夢であつたと

言えるように……もうこれ以上お前が傷付く必要は無いんだ……)

死んだ家族は戻らない。だが禰豆子はまだ生きている、鬼になったとしてもだ。だからこそ生き残った妹だけでも、人として生きて幸せな日常を紡いで欲しい。

兄である彼はそれ以上望まなかった。

そこに珠世が、そこで、と続ける。

「貴方には二つ、お願いがあります」

一つは禰豆子の血を調べさせて欲しい。

二つは鬼舞辻に近い鬼の血を採取して欲しい。

この二つだ。

「貴方からすれば鬼舞辻の血を採取するのは容易でしょう。ですが鬼舞辻だけでは無く、出来る限り複数の鬼の血が治療薬に必要になります。それに鬼舞辻は狡猾で生き意地が汚い。あれ程の事があったのです。あいつ自身が暫く表立って動くこともないでしょう」

それに関しては問題無い。隠された無限城の場所も暴いた。引き摺り出す方法もある。禰豆子が人間に戻った暁には、即座に鬼舞辻を殺す事も難しくは無い。

「それに関しては問題ありません。根城の場所ももう識りましたから」

珠世は驚いた表情をとった後、直ぐに表情を柔らかくして言った。

頼もしい限りです、と。

ここで彼はあ、と何かを思い出したのか一つ質問をぶつける。

「珠世さんと出会った時、俺の事を狩人と呼びましたよね。貴方達が知っている本来の狩人とはかけ離れてると思うんですが、何故そう呼んだのですか？」

暫し珠世は思考を巡らせ、口を開く。

「……それは」

そこで今まで沈黙を貫いていた愈史郎が血相を変える。

「っ!? まずい!」

その一言で瞬時に判断した彼は壁越しに貫通銃を放ち、外に居る鬼の攻撃を潰した。

「妹をお願いします」

彼はそれだけを言い残すと加速の業を使い、外へ出て行った。

「つく、何故じゃ! 流れ者が居ると聞いたのに、何故あいつが!」

体勢を立て直した鞠を持つ鬼が驚愕しながら此方を見る。他にも、掌に矢印が刻まれた瞳を持つ鬼も居るようだ。

目当ては珠世の様だ。早々に彼の出番が来た。

都合が良い、手始めにこいつらの血を取る事にしよう。

狩人が意気揚々と仕掛け武器に日輪を付与してる最中、鬼達は恐怖し、踵を返して逃げようとするが、逃げる為に足を動かそうとすると全身に激痛が走る。

逃れ者だけでも殺せと細胞無惨が肉体を蹂躪する。

逃れない。逃げれば死ぬ。逃なくても死ぬ。折角あの御方から血を与えてくださったと言うのに。

細胞に刻まれた恐怖により、鬼達は恐慌状態に陥りながら、我武者羅に攻撃を出す。感情的な攻撃が狩人に当たる筈も無く、紙一重で避けつつ一歩一歩近づいて行く。

「ひっ！…来るな来るな来るなあ!!？」

更に恐怖心が体を支配して行く。矢印の鬼も投げられた鞆を操作して必死に狩人に当てようとするが、それでも尚当たらない。

そして短銃の射程内に入り、相手の攻撃の出始めを読み、発砲し体勢を崩した。

「まずは、鞆鬼から」

そう言つて加速の業で体勢を崩した鞆の鬼の眼前に立ち、逃げれない様踏み付ける。

〃血の呼吸 壱ノ型 首狩 〃

体勢を崩す事によつて生まれた隙に叩き込む、鬼に対しての内臓攻撃に代わる渾身の攻撃だ。血質付与だけでは鬼を狩るには至らないと考え、彼が独自に編み出した型である。

両手で武器を持ち首に振り下ろす。若しくは頭ごと叩き潰す。

体勢を崩さなければ使えないが、逆を言えば体勢を崩せば即座に鬼を狩る事ができる。初歩の技にして必殺の威力を持つ型だ。

そして次は矢印の鬼だ。

“ 血の呼吸 壱ノ型 改 裏狩 ”

加速の業で背後に回り込み、うなじから腰骨にかけての中樞神経を破壊する様に攻撃し、鬼だろうと一時的に全身を麻痺させそこから首狩に移行する壱_骨ノ型_後の応用_{致命}技だ。

こうして彼は、大して手間取る事もなく二体の鬼を狩った。

だが……

「がっ!!? ああああああああ!!!」

「ぐうううううう!!!」

二体の鬼が、同時に苦しみ出す。

彼の直感が、これは拙いと判断した。

それは嗅いだ事がある匂いだった。地獄の様な悪夢で、罹患者の様な、獣の匂いが。彼が動こうとした瞬間、消えずに残り続ける鬼の頭が更なる怯えの色を見せる。

「やめろ来るなあ!」

「なんじゃ此奴らは! 汚らわしい近寄るな触るな!!?」

鬼の体も同様に残っており跳き苦しむ様に己の体を掻き巻く。それ程までに何かに怯えるのは異常だ。周囲には彼と鬼しかおらず、鬼の視線は彼の方向を向いているわけじゃ無い。何かしらの幻覚に苛まれているのだろう。

そして徐々にだが、体の方に変質が起き始める。異音を発しながら骨格は変わっていき、獣の様に体毛が濃くなって行く。

それは罹患者の獣のように四足歩行へと変わって行く。

それは聖職者の獣のような体躯へと変わって行く。

鬼舞辻の血によって抑圧された獣性が、首を狩られる事で解放された。

聖職者のそれとは比べ物にならないほどに鬼舞辻の細胞の抑圧は強く、その反動は本来の聖職者の獣を越える。

ただし、それでも獣性を抑圧されていた期間は短く、尚且つ薄い。

それでも朽ちるはずの鬼の細胞を獣性が無理矢理縛り付け、首のない鬼であり、尋常ならざる再生力を持つ獣が誕生した。

首無しの獣鬼。

首という弱点を失い、朝日を待つと言う持久戦を強いられる。もしかすると獣の側面が鬼の弱点を覆い隠してるかもしれない。となると殺す手段は無い。

だが彼は違う。彼は鬼狩りでは無く、飽くまで狩人だ。最も手慣れた相手であり、こ

う言った獣の狩り方も凡その見当がついている。

彼は夢からノコギリ鉋を取り出す。一番扱い易く罹患者の獣によく効く武器だ。左手には獣狩りの短銃を持ち、呼吸を必要としない本来の戦い方が彼には一番馴染んでいるし、獣相手には全集中の呼吸よりこちらの方が効果的だろう。

そう考えていると、首無しの獣は未だに朽ずに残った己の頭へと向かう。

「おい……？　何をする気だ……？」

体の制御が効かず、体は尚止まらない。この先に何が起きるか理性が理解し本能が拒絶する。動こうにも首から下は再生の兆しは見せず、ただ近づくのを眺めることしかできな

「やめろ……やめてくれ……！」

獣がそれぞれの首の前で立ち止まる。

首の断面が花を咲かせるように開き、鬼の頭を喰らわんとする。

「やめろおおおおお！！？」

骨を砕く音と同時に潰れる音が響く。

これには彼も驚いた、自ら首をつなげてくれれば狩りやすくなると思ひ静観していたが、まさか己の頭を喰らうとは思ひもよらなかつた。

だが、やることは変わらない。なるべく多くの肉を削り、血を掻き出して、鬼の側面

を現出させ、押し留められた細胞を自壊させる。

それだけのことだ。

ただ、それだけのことなのだ。

幕間 独白

ああ、これではだめだ。この体に蓄積させた毒だけでは奴を殺し切れない。

磨かなくては、技を、肉体を、毒を。

体格が小さく、筋力が少ないというのは言い訳だ。

少なくとも私は正解を垣間見た。

あのような小さな子供であろうと富岡義勇と斬り結び、押し切ったその姿を。

そして私は知った。あの子供ならば力など必要とせず鬼の首を切り落とせる技量を。

そして私は宿した。あの子供が持つものに比べれば残滓というにも烏滸がましいそれ。

それは藤の毒をより強力に、より効果的に調合するために私を導いてくれる。

それは体の動かし方や刀の振り方を嘯き、私のような矮小な体軀でも強力な型を繰り出せる様にしてくれる。

それは私の肉体の錬磨に寄与し、効率的でしなやかな筋肉を生み出してくれる。

今の私ならばそこらの木端な鬼の首程度なら切り落とせるだろう。

今の毒ならば少量で下弦だろうと殺し、上弦も大きな弱体化を図れるだろう。

だがそれだけでは駄目だ。

あいつの首を切り落とせる程ではなくては。あいつを数滴で致死に至らせる程でなくは。

より己の体に毒を馴染ませ、肉体を衰弱させず、尚且つ強力な毒へとなるように。

ああ、今ならばあの子供と敵対したことを酷く後悔する。

あの子供がいれば、私を本当の正解に導いてくれる。あの子供がいれば毒の調査も飛躍的に進歩するだろう。あのような言葉を吐かせてしまったのもそう
だ。

……だがもう遅いだろう。

ならば今は少しでも出来ることを行い、山積みの課題を少しずつ崩していくとしよう。

ああ、一匹でも多くの鬼を殺せるようにならなくては。

鬼を殺せ。俺の過去が俺の体を突き動かす。

泥沼に足を取られながらも、全力疾走する終わりの見えない様に陥る感覚も。疲弊という名の錘の付けた枷を全身に付けながら戦う感覚も。

それらを無視して前へと突き進まなくては。

少しでも多くの鬼を殺さなくては。俺や炭治郎の様な子供を生み出さないために。

俺は知った。炭治郎が己の感覚を頼りに鬼を見つけ出していたことを。

俺は知った。数的不利をもつかもしれない立ち回りを。

俺は知った。炭治郎のもつそれとは比べものにならないほどに小さく、それでも見識に大きな変化を起こした脳の感覚も。

その脳の奥底に燻るそれがより鬼の足跡を辿らせ、鬼の居場所を齎す。

その脳に生まれた異物が俺に鬼の殺し方を囁く。

だがそれでは足りない。

より感覚を鋭くし鬼へと至る痕跡を見つけ出せなくては。

より戦いの経験を積み、効率的に鬼を滅する事が出来なければ。

より脳の感覚に耳を傾け、より多くの鬼を殲滅しなければ。

今でも炭治郎と敵対したことを酷く後悔する。

炭次郎がいればより多くの鬼を殺せるだろう。炭治郎がいれば俺より上手くやれるだろう。家族を直向きに護ろうとするその姿を見極められなかったこともそうだ。

……だがもう遅い。

ならば今は己に出来ることをするべきだ。一向に減らない鬼も、地道に殺していくとしよう。

ああ、早くこの世から鬼を滅殺しなければ。